

# 奈良絵本「花鳥風月」について

— 奈良大学図書館本の翻刻と釈文 —

## 要旨

「花鳥風月」は、扇合に出された一枚の扇に描かれた男女について、「その男は業平か、源氏か」という争論になり、梓巫女の姉妹、花鳥と風月を呼び寄せて、その不審を晴らすという物語である。お伽草子に「伊勢物語」と「源氏物語」を取り込んだところに特徴があり、それ故に古典の学習書としての性格を持つものとも言われている。

奈良大学図書館には、二種類の奈良絵本「花鳥風月」（A本、B本と称する）が所蔵されている。どちらも九曜文庫の旧蔵品であり、既に影印が刊行されているが、翻刻はなされていない。そこで本稿では、B本の翻刻と釈文を作成し、その翻刻をA本と校合する。そして、その結果に基づき、両本の本文の系統について考察する。また、挿絵については、本文と照らし合わせながら場面内容を比定し、その特徴を明らかにする。

キーワード：「花鳥風月」、奈良絵本、挿絵

## はじめに

本稿で紹介する奈良絵本「花鳥風月」は、平成二十六年度（二〇一四）に奈良大学図書館が購入したものである。二冊あるが、一組のものではなく、各一冊からなる同名のもの二件である。通常は閉架図書として収蔵されているが、この「花鳥風月」と二年前に購入した奈良絵本「文正草子」を平成二十七年夏に展示公開することが立案され、その企画を塩出が担当することになった<sup>1)</sup>。そこで同年前期は、本学大学院で担当する美術工芸史学特殊講義Ⅱの教材として「花鳥風月」を活用し、図書館の展示も講義の一環として実施することとした。本稿は、その成果として二件のうち一件の翻刻と釈文を掲載し、若干の考察を加えたものである。なお、翻刻にはもう一件との校合結果を加え、併せて挿絵についても検討を加えた。本文は塩出が執筆し、翻刻、校合、釈文は全員で分担した（分担箇所は後述）。

\* 塩出貴美子・楨坂祐美・太田 均  
\*\* 渡邊将隼・中尾優司

## 一 奈良大学図書館蔵「花鳥風月」の概要

## (一) 内容

奈良絵本は、室町時代後期から江戸時代中期にかけて流行した挿絵入りの写本である。題材は古典、お伽草子、芸能、仏教説話など多岐にわたるが、最も多いのはお伽草子であり、「花鳥風月」もこれにあたる。「花鳥風月」という題名からは自然の風物を愛でるような風雅な物語が想像されるが、実際にはそうではなく、花鳥と風月という梓巫女の姉妹が活躍する物語である。はじめに、あらずじを述べておく。

萩原院の時世のことである。春雨が降り続く頃、葉室中納言の御所では徒然のあまりに扇合が催される。そこに山科少将が出したのは一組の男女を描いた扇であった。その男は在原業平か、光源氏か、座敷を二つに分けての争論になり、中納言の提案で梓巫女の姉妹、花鳥と風月が呼ばれる。まず、業平方の人々が、「心の内に尋ねる人は誰か」と問うと、花鳥は短冊を使った占いで「業平」と言い当てる。さらに梓弓を用いて口寄せを行い、問い手となった風月の間に次々に答えていく。しかし、人々は「業平」と思っていることを明かさない。そこで、風月は「扇絵の男は業平ではない、人違いである」と言う。これ聞いて、人々は恐れ戦く。次に、源氏方の人々が、「それでは誰か」と問うと、花鳥は神鏡に扇絵の男、すなわち源氏の姿を祈り出して見せる。源氏は花鳥の口を借りて、「愛別離苦の罪に沈み、成仏できないでいる。罪障を懺悔するために現れた。後を弔ってほしい」と述べ、

その生涯を語り始める。ところが、話が一段落した時、扇絵の女が鏡の中に現れ、風月に乗り移る。女は未摘花であり、生前は抑えていた源氏への恨みと他の女たちへの嫉妬を吐露する。しかし、最後は自らの姿を恥じて懺悔し、件の扇絵は源氏に誘われて一緒に雪を眺めた冬の朝の場面であることを明かして消え去る。風月は元に戻るが、花鳥にはまだ源氏が取り憑いたままである。そこで、中納言は源氏に『源氏物語』の<sup>①</sup>ことを尋ねる。源氏は天皇、妃、帖数、和歌の数などについて答えた後、「桐壺」から「夢の浮橋」までをなぞっていく。そして、「花鳥風月の縁」によって菩提にいたり、「生死即涅槃、煩惱即菩提」と思い悟ったことを告げて消え去る。花鳥も元に戻り、巫女の姉妹は賛嘆した人々から褒美を賜って帰って行った。

以上が「花鳥風月」のあらずじであるが、その最大の特徴は『伊勢物語』と『源氏物語』を取り込んでいることであり、その点で「御伽草子」としては異色のある作品<sup>②</sup>と言われている。また、『お伽草子事典』の解説では、「お伽草子の物語世界に『伊勢物語』や『源氏物語』の基礎知識を盛り込んだ、学習書としての性格を持つものであり、それが美しい巫女姉妹を介在として、業平や光源氏の霊から伝授される<sup>③</sup>というかたちをとることによって、芸能性と呪術性に満ちた独特の世界を構成している」と評されている。なお、同書によれば、萩原院（花園天皇、文保二年（一三二八）讓位）の世という時代設定からするならば、中納言には葉室長隆、少将には山科教行があてられるとのことである。また、本文の成立は、『山科家礼記』長祿元年（一四五七）

十月八日条に書写の記事が見えることから、それ以前であるとされている。

伝本は数多くあり、「室町時代物語類現存本簡明目録」(以下、「簡明目録」)には二十二件が収録されている<sup>4)</sup>。これについては次章で述べる。

## (二) 書誌

奈良大学図書館が所蔵する二件の「花鳥風月」は、中野幸一編『奈良絵本絵巻集 別巻3』に収録されたものにあたる。同書は全冊の影印を掲載し、解題を付している。書誌については、既にこの解題で紹介されているが、ここで改めて見直しておくことにしたい(以下、一本をA本、他本をB本と称する)。

### 《A本》

〔形態〕 冊子(横本)

〔装丁〕 四目綴・袋綴

〔法量〕 縦十六・五センチ

横二四・六センチ

〔外題〕 華鳥風月

〔表紙〕 薄茶紙 銀野毛散

〔見返〕 金切箔散

〔料紙〕 二十五丁

〔挿絵〕 六図

### 《B本》

冊子(横本)

四目綴・袋綴

縦十六・七センチ

横二四・三センチ

花鳥風月

紺紙金泥絵

銀地(空刷)

三十六丁

六図

両本とも典型的な横本の奈良絵本であり、二つ折りにした料紙を四目綴で装丁する。大きさもほぼ同じであり、横本の通常サイズである。

A本の表紙は薄茶色の紙に銀の野毛を散らしているが、これは後補であり、当然のことながら「華鳥風月」と記された題箋も金の切箔を散らした見返しも後補である(図1・2)。一方、B本の表紙は原装であり、奈良絵本に通例の紺紙金泥絵である(図3・4)。表紙も裏表紙もともに金泥の霞を引き、葦と波間に浮かぶ水草を描いている。ただし、残念ながら傷みが甚だしく、表紙は左下半に、裏表紙は左右の端に欠損が目立つ。表紙の中央には朱色の題箋が貼られ、「花鳥風月」と記されている。見返しは銀地であるが、焼けによる変色が目立つ(図5・6)。しかし、よく見ると、松、橘、菊などとともに鶴の姿が空刷りされているのがわかる(図7・8)。

A本の料紙数は現状では二十五丁であるが、冒頭を欠失しており、本文はB本の第十丁表九行目にあたる部分から始まる。また、第一丁と第二十五丁は後補の白紙であり、本来の料紙で残っているのは二十三丁分である。本文の欠失は約四分の一に及ぶことから、当初は三十三丁であったと推定される。一方、B本は三十六丁で完備し、遊び紙はない。本文は両本とも半丁あたり十三行である(図24～29)。ただし、A本は数行の本文の後に挿絵を加える場合がある(図9・10・12・14)。一方、B本は段落の末尾に余白が生じる場合は散らし書きにしている(図30～31)。

挿絵は両本とも六図である(図9～14・16～20)。ただし、A本は

欠失部にもう一、二図あったのではないかと推測される。A本の第一図は見開きであるが、この第一図、および第二図、第四図、第六図では、先述の如く右端に本文が一、四行入り込んでいる。このように本文と挿絵が一枚の料紙の上で共存するのは、奈良絵本としては古い形式である。また、A本は画面の上下に曲線を連ねた源氏雲を描いているが、これも古様な表現である。中野幸一氏は、A本の書写年代について「室町末、慶長の頃まで遡るものと思われる」と述べているが、当を得たものと言えるだろう。一方、B本の挿絵は六図とも半丁に一図が当てられている。画面の上下にはすやり霞が配されるが、既に定型化が進んだ段階のものであり、奈良絵本としては中期以降のものとして推測される。なお、本稿では制作時期が古い方をA本、新しい方をB本とした。

両本とも本文の一行目右下に、同じ「九曜文庫」の朱文長方印が捺されている(図24・28)。これにより、九曜文庫の旧蔵品であること、そして、A本の冒頭はその時点で既に失われていたことがわかる。

## 二 奈良大学図書館蔵「花鳥風月」の特質

### (一) 本文

本文については、本稿末にB本の翻刻を掲げ、これをA本と校合した。本来ならば制作時期が古いA本を基準とすべきであろうが、冒頭部が欠失しているため、B本を基準とした。両本を比較すると、かな

りの異同があるが、大部分は誤字や脱字、あるいは「い」と「ひ」、「え」と「ゑ」、「お」と「を」などの表記のゆれである。特に、A本は「い」とあるべきところを「ひ」と表記するのが目立つ。また、どちらも間違いではないが、「鏡」をA本は「きやう」、B本は「けい」、「行力」をA本は「をこなふちから」、B本は「きやうりき」と表記する例や、同じものをA本は「とうくう(東宮)」、B本は「しゅんくう(春宮)」とする例も見られる。

しかし、数は多くないが、顕著な脱文や異文も認められる。それを見る前に、ここで、「花鳥風月」の伝本を概観しておこう。先述の如く、「簡明目録」には二十二件が収録されており、そのうち未調査の四件を除く十八件は三系統に分類されている。その一部を抜粋する。

(一) 高安六郎旧・文禄4年奈良絵本 特大一冊《古典室物五・大成

### 三》

天理・伝飛鳥井雅俊筆奈良絵本 特大一冊《古奈良絵本集二》

(ロ) 岩瀬・奈良絵本 横二冊《古典室物五解題》

(二) 慶応・「室町後期」絵入写本(極め「扇合わせ物かたり」) 大一

冊《古典室物五・大成三》

(ロ) 赤木旧・奈良絵本 横一冊《古典室物五解題》

(三) 「慶長」刊古活字版九行絵入大本(高木旧)《古活字版の研究》

さて、A本とB本の本文は、右の中のどこに位置づけられるのだろうか。この点についても、既に中野氏が解題の中で述べているので、まず、そこで指摘されている点をまとめておこう。B本が先に挙げら

れているので、その順序に従う。B本の本文の特徴は以下の通りである。

- ・(イ)高安氏旧蔵本や天理本よりも叙述が詳しく、(ロ)慶応本に近いが、細部の異同は少なくない。
  - ・(二)慶応本と比較すると、概してB本の方が漢字の使用が多く、叙述が丁寧である。誤字も少なく、善本である。
  - ・B本には和歌が七首あるが、五首目の「くれなるの…」は(二)慶応本にはない。この部分については、慶応本は意味不明の部分が多く、B本の方がわかりやすい本文になっている。
  - ・和歌の数は、(一)高安氏旧蔵本および天理本は四首、(二)慶応本および(イ)古活字本は六首であるが、(ロ)赤木文庫旧蔵本は「くれなるの…」を含めて七首であり、B本と同じである(中野氏は和歌の数により、四首本、六首本、七首本の三類に分類する)。
- 次に、A本の本文の特徴は以下の通りである。

- ・(二)慶応本に最も近い。
  - ・現存部分の和歌三首は、順序的に見て「くれなるの…」を脱しているの、A本は(二)慶応本と同じく六首本である。
  - ・末尾の「まつたいと」以下の文章は、同じ六首本でも、(イ)古活字本にはなく、(二)慶応本にはある。この点でも慶応本に近い。
- 以上をまとめると、両本とも(二)慶応本に近いが、和歌の数からは、B本は慶応本よりも(ロ)赤木本により近いということになる。
- では、A本とB本の間で特に脱文や異文が甚だしいところを取り上

げ、慶応本および赤木本と比較してみよう。慶応本および赤木本は、横山重・松本隆信編『室町時代物語五(古典文庫一七二二)』を参照にした。<sup>9</sup> 同書は慶応本を翻刻し、部分的に赤木本との校合を傍書したものである。以下、右にB本を、左にA本を記す。傍線部が異同のあるところであり、「・」は該当箇所の字句がないことを示している。

① B本10ウ 第二段 異同番号18～26

「B本」およそ此人<sup>18</sup>く<sup>19</sup>の御事はいかさませんきまちく<sup>20</sup>にして<sup>21</sup>ねんころにもんとふしけれ<sup>22</sup>・とも人<sup>23</sup>く<sup>24</sup>なをしもかく<sup>25</sup>てなりひらとも<sup>26</sup>の給はねは風月申けるは<sup>26</sup>

「A本」をよそ此人<sup>18</sup>く<sup>19</sup>この御事はい<sup>20</sup>きまちく<sup>21</sup>にしていゑのくてん<sup>22</sup>ならすい<sup>23</sup>つれのいゑの哥をかもち<sup>24</sup>たまふとねん<sup>25</sup>ころにもんた<sup>26</sup>う<sup>22</sup>ければとも人<sup>23</sup>になをか<sup>24</sup>へしてなり<sup>25</sup>ひらとも<sup>26</sup>の給はず

A本には、B本にはない「家の口伝：」の字句が入り、内容が詳しくなる。この点は、A本は慶応本に、B本は赤木本に近い。

② B本11オ 第二段 異同番号33～38

「B本」なりひらの御事<sup>33</sup>を御尋<sup>34</sup>にて候<sup>35</sup>ものをた<sup>36</sup>・してかやうにおほせ候<sup>36</sup>かやしん<sup>37</sup>しち尋<sup>38</sup>・給ふ人は

「A本」なりひらの・事なり<sup>33</sup>た<sup>34</sup>・し御心のうちになりひらの御事をたつねたまへはこそかやうには申候<sup>36</sup>へしん<sup>37</sup>しつに尋<sup>38</sup>もとめ給ふ人は

A本の方が記述が詳しく、文意が通りやすい。B本の「た、して」は「質して」とも読めるが、A本の「た、し」が意味不明になったもののようにも思われる。これもA本は慶応本に近い(赤木本について

は傍書がないので、慶応本と同じと思われる)。

③ B本13ウ 第三段 異同番号41～44

〔B本〕つゐにしゆふかいをしたかへたまふ三くわんにきやうさう  
ゑんゆふの

〔A本〕つひにしうけいをしたかへたうのたいそうは人をもつてか、  
みとせしゆゑにてんかみな七とくのほまれうたいきあはうきうにたひ  
しか、みすひとさんのふかきあとたれかはか、みをしやうせざらん  
しくわんにきやうえんゆふの

A本に長い異文があり、異同番号43は「唐の太宗は人を以て鑑とせし故に、天下みな七徳の誉れ謳いき、阿房宮に賜びし鏡、すひとさんのふかき跡、誰かは鏡を賞せざらん」となるであろうか。意味不明の部分もあるが、太宗の故事を取り入れながら、鏡の威徳を述べようとしていることはわかる。これもA本は慶応本に、B本は赤木本に近い。

④ B本14ウ 第三段 異同番号64

〔B本〕これよくみかきすめるによつてなりしかるにわれくきみやうの

〔A本〕これよく見てけるとすちるとに世うらにみやうの

①②③とは逆にB本の意味が通り、A本は何かが抜け落ちて意味不明になっている。しかし、やはりA本は慶応本に、B本は赤木本に近い。

⑤ B本24ウ 第五段 異同番号26～32

〔B本〕すゑつむ花とてわらはれくさになりし事はたれゆへそくれな

ゐのはなそあやなくうとまるれむめのたちえはなつかしけれとよみ  
給ふ時<sup>30</sup>の御いせい<sup>31</sup>のはつかしき

〔A本〕すゑつむ花とてわらはれくさいかなりし事・たれ・のたちえ  
ははつかしけれともはめたまひし<sup>30</sup>ときの御わせゑ<sup>31</sup>のはつかしき

中野氏が指摘した和歌の数に関する異同の部分である。B本は「くれなるの」の和歌を最後まで収録し、前後の文も意味が通っている。これに対し、A本は和歌が不完全であり、前後も意味不明である。これもA本は慶応本に、B本は赤木本に近い。

⑥ B本36ウ 第七段 異同番号1～5

〔B本〕・あまりのきとく<sup>2</sup>の事なれはふてにまかせてしるし<sup>4</sup>をくなり  
これを見たまはん人くはねんふつ十へん申給ひてかのひかる源氏の  
ゆうれいすゑつむ花のしうしんのほたいのためとゑかうし給へ<sup>5</sup>

〔A本〕まつたいと申なからあまりにきとく<sup>3</sup>なる事なれはふてにまか  
せてかき<sup>4</sup>をくなりこにちの御くわいこそゆかしくおほえ候へけんしか  
くのことし<sup>5</sup>

本文の末尾の部分である。A本は冒頭部を欠失するが、B本には「源氏、業平の争論の勝負につきて、御日の御会になさるべし」という一文がある。A本はこれを受けて「御日の御会こそゆかしく」で締めくくったものである。慶応本も同様である(赤木本についての傍書はないので、慶応本と同じと思われる)。一方、B本は源氏と末摘花が本文中で述べた「あととふらひてたひ給へ」という願ひを受け、読者にも二人の菩提を弔うように呼びかけたものである。これは他本に

は見られない本文である。

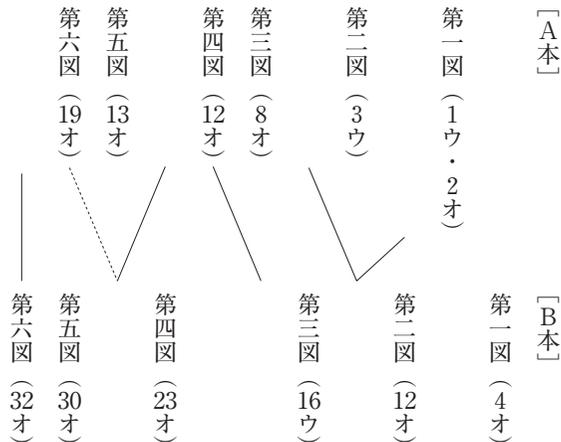
さて、以上をまとめると、①②③についてはB本よりA本の方が情報量が多く、意味も通りやすい。ところが、④⑤は逆にA本よりB本の方が情報量が多く、意味が通りやすい。しかし、いずれにせよ、これを慶応本および赤木本と比べると、A本は①⑤すべてにおいて慶応本に近いと言える。一方、B本は、赤木本が慶応本と異なる①③⑤については、慶応本よりも赤木本に近い。残る⑥については、A本は慶応本と同じであるが、B本は他本には見られない独自の本文である。なお、石川透氏が「簡明目録」には収録されていない一本を紹介しているが、A本はこれに極めて近いものである。

以上のことから、A本とB本には直接的な関係がないことは明らかであるが、脱文や異文の状況からは、どちらかと言えば、A本の方がB本よりも古い本文ではないかと思われる。また、本文の書体については、A本は癖が強く、能書とは言い難いものであるのに対し、B本は書写に慣れた筆耕者によるものである。この点からもA本は初期の奈良絵本、B本は奈良絵本の流行期、あるいはそれを少し過ぎた頃のものとして推測される。

## (二) 挿絵

挿絵は両本とも六図ずつあり、同じような場面を描いているが、本文への挿入箇所を見ると、A本第六図とB本第五図が同じである以外は、少しずつずれている。本文に対する両本の挿絵の前後関係を整理

すると次のようになる(場面内容が対応するものを線で結んだ)。



まず、A本から見てもみよう(図9～14)。

【第一図】 見開き図で、右頁には庭の風景、左頁には屋内の場面が描かれているが、画面としては繋がらない。このように左右の画面が食い違うことは、初期の奈良絵本では珍しいことではない。屋内の場面は花鳥が業平について語るところである。本文によれば、花鳥は梓弓を鳴らしているはずであるが、画面には描かれていない。『人倫訓蒙図彙』巻七の「くちよせみこ」(図23)を見ると、前に箱を置き、

その上で梓弓を鳴らしているので、画面左上の箱を前にしているのが花鳥、もう一人が問い手になった風月と見なされる。画面左には、葉室中納言や山科少将を含む公達が描かれている。

【第二図】直前の本文は、業平についての話が終わり、源氏方の人々が花鳥に問いかけるところで終わっている、この場面と見ておく。画面右上の二人が中納言と少将、右下の男が源氏方の代表であろう。

【第三図】花鳥の神鏡に源氏が現れ、罪障懺悔を始めたところである。女が三人になっているが、天理本には周囲に数人の女房を描いた場面もある、ここも一人は女房と見ておく。

【第四図】神鏡に末摘花も現れたところであり、鏡の中に源氏と末摘花が描かれている。末摘花は本文の通りに袖で口を覆っている。鏡の向かって左に座る男は鏡の中の源氏と同じ装束であることから、鏡から抜け出した源氏と見なされる。ここには花鳥と風月の姿はない。

【第五図】恨み言を述べる末摘花に源氏が語りかけることである。本文では、源氏は花鳥の、末摘花は風月の口を借りて語ることになっているが、ここには花鳥と風月の姿はなく、鏡も一座の人々も消えて、鏡から抜け出した源氏と末摘花が語り合う場面になっている。

【第六図】直前の本文は末摘花が消えたところで終わっており、鏡の中は源氏だけになっている。しかし、鏡の外では、その鏡を挟んで、まだ源氏と末摘花が対峙している。末摘花は立ち姿であり、去って行く直前なのである。花鳥と風月、中納言も描かれており、末摘花以外は第三図とよく似た画面である。

初めから終わりまで同じ場所で話が展開するため、屋内の場面が続くが、六図を通覧すると、建物の描写はそれぞれの画面で異なっている。また、源氏の白の直衣と末摘花の黄色の上衣は一貫性があるが、そのほかの人物の着衣には一貫性がない。よく言えば大らか、悪く言えば無頓着な描きぶりであるが、これも奈良絵本では珍しいことではない。人物は引目鉤鼻を踏襲した愛らしい顔立ちであるが、男は目がつり上がり、鼻先が尖った独特の顔を、やや上向きに描いたものが多い。特徴的な表現としては、第四図以降に鏡から抜け出した源氏と末摘花が描かれている点が挙げられる。ただし、同様の表現は石川本にも見られる<sup>12)</sup>。六図とも画面上下には弧線を繋いだ源氏雲を描いているが、画面上方を青、下方を赤紫とするのは、料紙装飾の一種である打曇を連想させる。このような雲の表現は、奈良絵本の中では古い形式である。

本文と挿絵の関係をみると、第三図以降は一文の途中で挿絵が割り込むように配置されている。第一図と第二図は挿絵の直前で一文が終わっているが、これも登場人物の科白の途中に割り込んでいる。先述の如く、六図のうち四図は挿絵と同じ丁に本文が数行入り込んでいるが、それにもかかわらず、挿絵のために本文が途切れているのである。このことから、A本は本文と挿絵の関係が十分に整理されていない初期的な段階のものとして推測される。

次に、B本を見てみよう(図16～22)。

【第一図】七人の男が車座になって扇合を行うところである。屏風

を背にする二人のうち、向かって右が葉室中納言、左が山科少将であろう。五枚の扇が描かれていたはずであるが、残念なことに、その部分がかくり抜かれている。

【第二図】直前の本文は花鳥が「扇絵の男は業平ではない」と言うところで終わっており、その場面と見ておく。本文には、花鳥は柳裏の桜襲、風月は紅葉襲とあり、薄緑の衣が花鳥、朱色の衣が風月と見なされる。A本第一図の少し後にあたるが、花鳥の前には梓弓も箱も描かれていない。

【第三図】花鳥の神鏡に、ちょうど源氏が現れたところである。A本第三図に相当するが、A本よりも少し前に位置する。

【第四図】神鏡に末摘花も現れたところであり、鏡の中に源氏と末摘花が描かれている。末摘花は本文の通りに袖で口を覆っている。A本第四図に相当するが、A本の本文より少し後に位置する。ここには花鳥と風月も描かれている。

【第五図】神鏡から末摘花が消えたところであり、鏡の中には源氏しか描かれていない。そのため第三図とよく似た画面になっている。これはA本第六図と同じ位置に挿入されている。

【第六図】花鳥と風月が褒美を賜るところである。本文には「小袖十襲、砂金百両」とある。小袖は反物で、砂金は巾着袋で表されている。

B本も当然のことながら屋内の場面が続くが、建物の表現は定型化しており、細部の異同はあるものの、第二図以降は相似た図様になっ

ている。また、第一図についても左下の襖を取り除いて左右反転すれば、第二図以降と大差のない画面になる。人物の配置もほぼ固定化しており、特に第三図と第五図は酷似する。そして、これらの図にもう一人縁に座る男を加えると第二図と第四図になる。花鳥と風月の装束には一貫性があるが、その他の人物については、同じ装束はあっても、厳密に対応しているわけではない。A本ほどではないが、B本もやはり無頓着な描きぶりである。人物は引目鉤鼻を踏襲したもので、上品な愛らしい顔立ちである。六図とも画面の上下には霞が引かれている。線を一本引き、その左右に先端に丸みを付けたすやり霞を添えたもので、全体としては凹の形になっている。輪郭線以外にも横線が数本加えられているが、これは奈良絵本のすやり霞の最も典型的な表現である。

さて、A本とB本を比較すると、A本の第一図と第二図がB本の第二図に対応し、以下、第三図が第三図に、第五図が第四図に、第六図が第五図に対応する。ここから外れるのはA本第四図、B本第一図と第六図であるが、A本第四図は内容的にはB本第四図に含めることができる。また、B本第一図は物語冒頭の扇合の場面であり、これはA本においては失われた部分に描かれていた可能性が高い。したがって、他本にはない場面はB本第六図の花鳥と風月が褒美を賜るところだけである。両本は、このようにほぼ同じ場面を描いているが、図様は全く異なっており、その間に影響関係があるとは考えられない。

## おわりに

本稿では、奈良大学図書館が所蔵する二件の奈良絵本「花鳥風月」について、本文と挿絵を比較検討した。本文については、まずB本を翻刻し、これをA本と校合した。そして、脱字や脱文のため意味が通りにくい部分もあったが、B本の釈文を作成した。本文の系統については、既に中野氏が指摘していることを追認したに過ぎないが、B本については赤木本との関係をより積極的に傍証することができたと言えるだろう。挿絵については、本文と対応させながら場面比定を行った。両本は内容的には同じような場面を描いているが、図様は全く異なっている。

最後に図書館の企画展示について付言しておきたい。「花鳥風月」の展示には、壁面ケースと四つある平ケースのうち一つを宛てた。A本とB本は平ケースに展示し、関連図書として、両本の影印を掲載する『奈良絵本絵巻集』別巻3<sup>13</sup>、天理本の影印を掲載する『天理図書館善本叢書と書之部37 古奈良繪本集』<sup>14</sup>、高安氏本の翻刻を掲載する『室町時代物語大成』第三<sup>15</sup>、および紫社社文庫の『奈良絵本』<sup>16</sup>下を並べた。壁面ケースには、美術史の立場から、挿絵のパネルを展示して、比較ができるようにした。また、冊子本は見開き一ヶ所しか展示できないので、全頁を閲覧できるように、「デジタル奈良絵本」および「ちよつとミニ複製本」を制作した。「デジタル奈良絵本」は、本学社会学部総合社会学科の正司哲朗准教授に制作していただいた。「ちよつとミニ複製本」はA本、B本の画像を印刷し、本物と同じように和綴じにしたもので、院生と学生による手作りである。

今年度前期の講義は「花鳥風月」の撮影から始め、翻刻と釈文の作成を進めながら、展示計画を練った。展示作業も講義の一環として行い、受講生以外にも関心のある学生には参加してもらった。このように図書館資料を講義に活用させていただいたことに感謝する。

## 注

- (1) 奈良大学図書館企画展示「奈良絵本「花鳥風月」と「文正草子」付、「大織冠」は、平成二十七年八月一日(日)より九月二十日(日)まで、同館展示室で開催された。
- (2) 天理図書館善本叢書と書之部編集委員会編『天理図書館善本叢書と書之部37 古奈良繪本集』八木書店、一九七五年、十頁。
- (3) 徳田和夫編『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇二年、二〇〇頁(作品項目解説 真下美祢子)。
- (4) 奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』所収、三省堂、一九八二年、七〇―七二頁。
- (5) 中野幸一編『奈良絵本絵巻集別巻3』早稲田大学出版部、一九八九年。
- (6) 注5掲載書、解題五頁。
- (7) 注4に同じ。
- (8) 注5掲載書、二―五頁。
- (9) 横山重・松本隆信編『室町時代物語五(古典文庫一七二)』古典文庫発行、一九六一年。
- (10) 石川透『室町物語影印叢刊15 花鳥風月』三弥井書店、二〇〇三年。

- (11) 蒔絵師源三郎他『人倫訓蒙図彙』平楽寺、元禄三年（一六九〇）。
- (12) 注11掲載書、五〇頁。
- (13) 注5掲載書。
- (14) 注2掲載書。
- (15) 工藤早弓『奈良絵本・下』（紫紅社文庫）、紫紅社、二〇〇六年。
- (16) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第三』角川書店、一九七五年。

## 奈良絵本「花鳥風月」翻刻と釈文

## 【凡例】

- ・ 上段にB本の翻刻を、下段にその釈文を掲載した。
- ・ 翻刻にあたっては、改行は原文通りとし、改頁は二行目の行頭に「1オ」「1ウ」のように示した。「1オ」は第一丁表、「1ウ」は第一丁裏の略であり、以下、これに準じる。
- ・ 翻刻はA本と校合した。異同のある箇所は傍線を引き、段ごとに通し番号を付して末尾にA本の字句を示した。ただし、「ナシ」はB本の字句がA本にはないことを示し、逆にA本の字句がB本にない場合は、B本に「・」を挿入した。なお、漢字と仮名の異同は無視した。
- ・ A本の改頁はB本の翻刻の中に「1オ」のように示し、同じく挿絵の位置は「挿絵1」のように示した。なお、A本の遊び紙は後補であるので無視することとし、本文があるところから教えた。
- ・ 釈文の作成にあたっては、適宜、仮名を漢字に改め、句読点を加えた。また、科白には鉤括弧を付した。

分扱は左記の通りである。

塩出	1オ～3ウ・14ウ～16オ・30ウ～32ウ
太田	4ウ～6ウ・23ウ～26ウ
中尾	7オ～11ウ・27オ～29ウ
渡邊	12ウ～14オ・33オ～35ウ・36ウ
槇坂	17オ～22ウ

## 【第一段】

1オはきはらのみんの御時花

## 【第一段】

萩原の院の御時、花

のみやこにし山はむろ  
の中納言の御所にて雲の  
上人なまかたちちめあつま  
りて梅はちり桜はおそき  
おりふし雨はいたくふり  
つ、き春の日くらしかた  
きにつれく／＼のあまりに  
あふきあわせをしたまふ  
かんかほんてうの物かたり  
古今まんえうのうたの心  
さま／＼に筆をつくして  
かきたるいろく／＼のあふき  
1ウともその中に山しな  
のせいしやうのいたされた  
るあふきのゑにきたいふ  
しきのゑをそ書たりよ  
うかんこひをつくしその  
かたちいふはかりなくうつ  
くしき公家上らう一人又  
かたはらに女のくちおほひ  
したる所を筆をつくして  
書たりけり人く／＼これを  
見ておのく／＼ふしんをな  
し給ふあるひはこれはいかさ  
まなりひらにてこそあれ

2オいふ人もありいやく／＼これは

の都に、西山、葉室  
の中納言の御所にて、雲の  
上人、生上達部、集ま  
りて、梅は散り、桜は遅き  
折節、雨はいたく降り  
続き、春の日、暮らしがた  
きに、徒然のあまりに、  
扇合をし給ふ。  
漢家、本朝の物語、  
古今、万葉の歌の心、  
様々に筆を尽くして  
かきたる色々の扇  
どもその中に、山科  
の少将のいだされた  
る扇の絵に、稀代不  
思議の絵をぞ書たり。容  
顔媚びを尽くし、その  
かたち、言ふばかりなく美  
しき公家上藤一人、又、  
傍らに女の口おほひ  
したるところを、筆を尽くして  
書きたりけり。人々、これを  
見て、おのく／＼不審をな  
し給ふ。或いは、「これは、いかさ  
ま、業平にてこそあれ」  
言ふ人もあり。「いやく／＼、これは

ひかるけんしにてこそあれとさしき二つにおし

わけてそうろんし給ふ中

にもはむろの中納言殿の

おほせにはしよせん此繪の

ふしんをやかてはれ候はん

するやうの候なりそれをいかに

と申にこ、にきたいなる

物の上手のみこの候かもと

ははくろのものにて候ひけ

るみこおと、ひ有あねは花

鳥いもうとは風月と申也

2ウそらとふ鳥をものりを

とし又は過去みらいの事

をとふにあきらかなるか、

みのごとく何もくもりな

く申はさすのみことも申

へき程のもの、上手なり

とりわけ人をあつさにか

けてくちをよする事しん

へんふしきけんちやうなり

此程このあたりに有よし

を申これをめしよせて此

そうろんのやうをはつやく

申候てうらなはせ候かさ

3才すはくちをよせさせてふ

光源氏にてこそあ

れ」と、座敷二つに押し

分けて、争論し給ふ中

にも、葉室の中納言殿の

仰せには、「所詮、此繪の

不審を、やがて晴れ候はん

ずるやうの候なり。それを如何に

と申に、こ、に稀代なる

物の上手の巫女の候が、もと

は羽黒の者にて候ひけ

る巫女姉妹あり。姉は花

鳥、妹は風月と申也。

空飛ぶ鳥をも折り落

とし、又は、過去未来の事

を問ふに、明らかなる鏡

の如く、何も曇りな

く申は、さすの巫女とも申

へき程の物の上手なり。

とりわけ人を梓にか

けて口を寄する事、神

変不思議、けんちやうなり。

此程、このあたりに有るよし

を申す。これを召し寄せて、此

争論のやうをば、つやく

申候て、占はせ候か、さら

ずは、口を寄せさせて、不

しんをはればやとの給へは

人くこれなき、給ひお

もしろき御いけんにて候

いそぎくめされ候へと申

されけり山しなの少将の

給ひけるはこれはちかころい

つけう又はけうかるき、事

にて候けんしなりひらの

そうろんのせうふにつきて

後日の御くわいになさるへし

さあらは源氏とおほせら

る、方はけんしの事な

3ウりひらとおほせ候

方はなりひら

の事を

今のよの事

のやうに

御たつね

あるへし

と

申され

たり

4才(挿絵1)

審を晴ればや」との給へば、

人々、これを聞き給ひ、「面

白き御意見にて候。

急ぎく召され候へ」と申

されけり。山科の少将の

給ひけるは、「これは近頃、一

興、又はけうかる聞き事

にて候。源氏、業平の

争論の勝負につきて、

後日の御会になさるべし。

さあらば、源氏と仰せら

る、方は源氏の事、業

平と仰せ候

方は業平

の事を、

今の世の事

のやうに

御尋ね

あるべし

と

申され

たり。

(挿絵1)

【第二段】

4ウさるほどに花鳥風月おと

【第二段】

さるほどに、花鳥風月姉

といは参りたりあねの花鳥  
は柳うらの桜かさねのき  
ぬのにほひことなるにくれ  
なるのはかまきて丹花の  
くちひるあさやかにせいたい  
のまゆすみほのくくとさし出  
たれば名にしをふ花鳥の  
色もふかく春のはつねのけ  
ふのたまさかに咲そめたる  
花よりもめつらかなりい  
もうとの風月はもみちか  
さねの二つきぬにこうはいの  
5才はかまきてはくせつのはた  
糸すきををり玉のかんさ  
しゆりかけらんしやの  
にほひかうはしくさかの  
の原のおみなへしつゆをも  
けなるけしきにてゆる  
き出たる有様はなにし  
おふ風月もけにもとお  
もひしられけり人くこれ  
を見給ひてあらふしきや  
あつまのおくのかたあ中  
にもかゝるうつくしき女の  
有けるよとめをおとろか  
5ウすはかりなりさるほとに

妹は参りたり。姉の花鳥  
は、柳裏の桜襲の衣  
の匂ひ殊なるに、紅  
の袴着て、丹花の  
唇鮮やかに、青黛  
の眉墨ほのくとさし出  
たれば、名にし負ふ花鳥の  
色も深く、春の初音の今  
日のたまさかに咲初めたる  
花よりも珍らかなり。妹  
の風月は、紅葉襲  
の二つ衣に、紅梅の  
袴着て、白雪の膚  
透き通り、玉の髪ざ  
しゆりかけ、蘭奢の  
匂ひ香ばしく、嵯峨野  
の原の女郎花、露をも  
殊なる景色にて、ゆる  
ぎ出たる有様は名にし  
負ふ風月も、げにもと思  
ひ知られけり。人々、これ  
を見給ひて、「あら不思議や、  
吾妻の奥の片田舎  
にも、かゝる美しき女の  
有りけるよ」と目を驚か  
すばかりなり。さるほどに、

人くおほせられけるはめ  
いよの御事とうけたまはり  
およひ候ほとにたつね申度  
事候てこれまで申て候な  
りとの給ひければ花鳥う  
けたまはりめいよまてはさふ  
らはねともめしによりて  
参て候なりもし上らうた  
ちの御わらひくさになりま  
いらせ候はんするにて候なに  
事にて御たつね候へとそ  
申けりさてなりひらかた  
6才の人く申されけるはし  
よせんた、いま心の内にた  
つね申人は此世にある人かな  
き人か其名をはいかやうにか  
申又はおとこか女かくはし  
くうらなひて給はり候へと  
有ければあねの花鳥うけた  
まはりたんざくを一つとり  
いたしつくくとまほり  
て申やうあらおもしろのう  
らかたやいにしへのならの  
こすゑのつゆのたまさかにあ  
ととふひとまなき物を何し  
6ウにたつねたまふそやわれは

人々、仰せられけるは、「名  
誉の御事と承り  
及び候ほとに、尋ね申度  
事候て、これまで申て候な  
り」との給ひければ、花鳥、  
承り、「名譽まではさぶ  
らはねども、召しによりて  
参て候なり。もし、上臈た  
ちの御笑ひ草になり参  
らせ候はんするにて候。何  
事にて御たつね候へ」とぞ  
申けり。さて、業平方  
の人々、申されけるは、「所  
詮、只今、心の内に尋  
ね申す人は、此世にある人か、亡  
き人か。其名をば如何やうにか  
申す。又は、男か、女か。詳し  
く占ひて給はり候へ」と  
有りければ、姉の花鳥、承  
り、短冊を一つ取り  
出し、つくくとまほり  
て申やう、「あら、面白の占  
方や。『いにしへの奈良の  
こすゑの露のたまさかに、跡  
問ふ人もなき物を、何し  
に尋ね給ふぞや。我は、

これてんちやう二年三月廿一日にたんしやうしてしゆんわにんみやうもんとくせいわやうせい五代のてうにつかへ奉りけんきやう四年正月廿一日にとし五十六にてむなしくなりしもの、跡なりとらのおもてに見えて候これはうたかひもなきいにしへのなりひらの御事をたつね候心あてにて候やらむとぞ申ける人くこれ7才き、めとめを見あはせあまりのふしきさにいやくこれはそら事にて候何しにいまなりひらの事をはたつね申へきよくくうらなひて御らんし候へとありければ花鳥うけたまはりいやくちかひ候まし猶もふしんにおほしめし候は、われくあつさにかけてこたへ申さん風月はとひてになりてとひ給へとてあつさのまゆみうちならしししゆの7ウうたにかくはかり

これ、天長二年三月二十一日に誕生して、淳和、仁明、文徳、清和、陽成、五代の朝に仕へ奉り、元慶四年正月二十一日に、年五十六にて空しくなりしもの跡なり」と、占の表に見えて候。これは、疑ひもなき、いにしへの業平の御事を尋ね候心宛てにて候やらむ」とぞ申ける。人々、これ聞き、目と目を見合はせ、あまりの不思議さに、「いやくこれは空事にて候。何しに、今、業平の事をば尋ね申へき。よくく、占ひて御覧じ候へ」とありければ、花鳥、承り、「いやく違ひ候まじ。猶も不審に思し召し候はば、我々、梓にかけて答へ申さん。風月は問ひ手になりて、問ひ給へ」とて、梓の真弓打ち鳴らし、一首の歌に、かくはかり。

おもふ事いはてた、にややみなましわれにひとしき人しなればそもくわれはかんれいわうのまめおとこの名をえて一しやうかひの間ちきりをむすひし人のかす三千七百卅三人なり其時風月たつねてになりて人くきにきかせ参らせんとて扱も五てうのきさきと申せしはたれ人にてわたり候やらん8才かんゐんのそう大しやう大しんふゆつくこうの御むすめにんみやうてんわうのきさき御とし三十八なりひら廿二にてはしめてあひ奉るさてぞめとの、きさきはたれ人の事ぞ大政大臣よしふさの御むすめもんとくてんわうのきさき水のをのみかとの御は、これなりさて二条のきさきと申はあつまのおくまでぬすみとりことに御身をくる8ウしめ給ひしはいかなる人

思ふ事言はでた、にややみなまし我に等しき人しなれば「そもく、我は管領王の忠実男の名を得て、一生涯の間、契りを結びし人の数、三千七百卅三人なり」其時、風月、尋ね手になりて、「人々に聞かせ参らせん」とて、「扱も、五条の妃と申せしは、誰人にてわたり候やらん」「閑院の相、太政大臣冬嗣公の御女、仁明天皇の妃、御歳三十八、業平卅二にて、初めて逢ひ奉る」「さて、染殿の妃は誰人の事ぞ」「太政大臣良房の御女、文徳天皇の妃、水尾の帝の御母、これなり」「さて、二条の妃と申は、東の奥まで盗み取り、殊に、御身を苦しめ給ひしは、いかなる人

の御事そあらなつかしの  
 人のなやうれしくたつ  
 ね給ふものかなそれこそ中  
 納言なかよしのきやうの御  
 むすめせいわてんわうの  
 きさき御とし十五なりひら  
 三十二にてきさきにたち  
 給ふよりはるかさきより  
 しのひく／＼にちかつき奉り  
 ある時はおに一口におそろし  
 きめを見又ある時はむさし  
 のはけふはなやきそともの、

9才ふをうらみすみた川に  
 てはみやこ鳥にことをとい  
 うつの山にては人にことつ  
 てをし心をつくし、人の  
 御事なりさていせさいくう  
 の御事はいかにあらことも  
 かたしけなやもんとくてん  
 わうの第二のみこかたし  
 けなくもいせ齋宮の女御  
 にてわたらせ給ひしをち  
 やうくわん十年になりひら  
 かりの御つかひの時をはじめ  
 あひ奉るあしたのことは

9ウ 君やこし我やゆきけん

の御事ぞ「あら懐かしの  
 人の名や、嬉しく尋  
 ね給ふものかな。それこそ、中  
 納言長良の卿の御  
 女、清和天皇の  
 妃、御歳十五、業平  
 三十二にて、妃に立ち  
 給ふより、遙か先より  
 忍びく／＼に近づき奉り、  
 ある時は、鬼一口に恐ろし  
 き目を見、又、ある時は「武蔵  
 野は今日はなやきそ」と武士  
 を恨み、隅田川に  
 ては、都鳥に事を問い、  
 宇津の山にては、人に言  
 伝をし、心を尽くしし人の  
 御事なり」「さて、伊勢齋宮  
 の御事は、いかに」「あら、ことも  
 かたしけなや。文徳天  
 皇の第二の御子、かたじ  
 けなくも、伊勢齋宮の女御  
 にて渡らせ給ひしを、貞  
 観十年に、業平、  
 狩の御使ひの時、初めて  
 逢ひ奉る。朝の詞、

君やこし我やゆきけん

おもほえずゆめかうつ  
 つかねてかさめてか  
 とありしかへり事に  
 かきくらすこ、ろのやみ  
 にまよひにきゆめうつ  
 つとはよひとさためよ  
 と申せしはこともかたしけ  
 なや扱かさりちまきの女は  
 いかにそれこそあにのゆきひ  
 らのきやうの御むすめさた  
 かすのしんわうの御は、にて  
 ましますさてみやす所は右

10才大臣ひろよしの御むすめ  
 にんみやうてんわうのみや  
 す所さてなまこ、ろある  
 女ときこえしはたれ人そ  
 事やらんそれこそそのこ  
 ろ天下にならひなき色  
 このみてわのくんし小の、  
 よしざねかむすめ小町か  
 事にて候へ「1才」きつにはめなて  
 といひし女・はみちのくのす  
 けさかみのかみつらおか、む  
 すめ・又ぞめ川の女ときこえ  
 しはた・そちくせんくのくに青  
 木の・ちかむねかむすめなり」。

10ウ木の・ちかむねかむすめなり

思ほえず夢か現  
 か寝てか覚めてか  
 とありし返り事に、  
 かきくらす心の闇  
 に迷ひにき夢現  
 とはよひと定めよ  
 と申せしは、こともかたじけ  
 なや「扱、飾り棕の女は、  
 いかに」「それこそ、兄の行  
 平の卿の御女、貞  
 数の親王の御母にて  
 まします」「さて、御息所は」「右  
 大臣広良の御娘、  
 仁明天皇の御息  
 所」「さて、生心ある  
 女と聞こえしは、誰人ぞ、  
 事やらん」「それこそ、その頃、  
 天下に並びなき色  
 好み、出羽の郡司、小野  
 良実が娘、小町が  
 事にて候へ」「きつにはめなて  
 と言ひし女は」「陸奥  
 介、相模守貫岡が  
 女」「又、染川の女と聞こえ  
 しは誰ぞ」「筑前の国青  
 木の親宗が女なり」

つくもかみの女は・治部少将<sup>11</sup>  
 ふちはらのさたなつかきう  
 さいなりさてふりわけか<sup>12</sup>  
 みの女はきのありつねかむすめ<sup>13</sup>  
 なり・くさは・といひし女は  
 きよたか、むすめなり「1ウ」四方  
 の山かすくはんへれとも<sup>17</sup>  
 事おほければ申まし「挿絵1」「2ウ」  
 およ<sup>18</sup>  
 此人くくの御事はいかさ  
 ませんきまちくにして<sup>21</sup>  
 ねんころにもんとふしけれ<sup>23</sup>  
 とも人くをしもかく<sup>25</sup>  
 11才してなりひらとももの給  
 はねは風月申けるはいやくく  
 さのみ・かくし給ひそ・みこ  
 のほねおりにはやくあ<sup>30</sup>  
 かさせ給へまさしく御心の<sup>31</sup>  
 うちに御たつね候人はなり<sup>32</sup>  
 ひらの御事を御尋にて候<sup>33</sup>  
 ものをた、してかやうにおほ<sup>34</sup>  
 せ候かやしん「3才」しち尋・給ふ<sup>36</sup>  
 人は  
 なりひらにては候はず人たか<sup>39</sup>  
 へにて候へしき候へはこそ此  
 うらのおもて又あつさのま<sup>40</sup>  
 「九十九髪の女は」「治部少将  
 藤原定夏が旧  
 妻なり」「さて、振り分け髪  
 の女は」「紀有常が娘  
 なり」「草葉と言ひし女は」  
 「清隆が女なり」「四方  
 の山、数くはんべれども、  
 事多ければ、申まじ」およ  
 そ、此人々の御事は、いか  
 さま、詮議まちくにして、  
 懇ろに問答しけれ  
 ども、人々、なをしも隠  
 して、業平とももの給  
 はねば、風月、申けるは、「いやくく、  
 さのみ隠し給ひそ。巫女  
 の骨折りに、早くく明  
 かさせ給へ。正しく御心の  
 内に御尋ね候人は、業  
 平の御事を御尋にて候  
 ものを、たゞして、かやうに仰  
 せ候かや。真実尋給ふ人は、  
 業平にては候はず。人違  
 へにて候べし。さ候へばこそ、此  
 占の表、又、梓のま

くらに<sup>42</sup> たつね給ふ人はあら  
 11ウはれ出給ひて候らめと  
 申ければ  
 人く  
 これを  
 き、身の  
 けも  
 よたつ  
 はかり  
 なり<sup>43</sup>  
 くらに、尋ね給ふ人は現  
 はれ出給ひて候らめ」と  
 申ければ、  
 人々  
 これを  
 聞き、身の  
 毛も  
 よだつ  
 ばかり  
 なり。  
 12才（挿絵2）  
 （挿絵2）  
 1 ね 2 わ 3 い 4 さかのうへの 5 ナシ 6 なり 7 れ 8 ち、中わ  
 うの 9 ナシ 10 いかにかに 11 せう 12 す 13 ありはらのむねやすかは、しけ  
 こか事 14 よしや 15 こ 16 こかこと 17 さてよひとはたれそそれこそいせか  
 事にて候へ此ほか 18 を 19 こ 20 ナシ 21 いゑのくてん一ならずいづれのい  
 えの哥をかもちひたまふと 22 たう 23 は 24 に 25 かへ 26 す 27 な御  
 28 候 29 けしからず 30 を 31 は 32 人く 33 ナシ 34 なり 35 御心のう  
 ちになりひらの御事をたつねたまへはこそ 36 は申候へ 37 つに 38 もとめ  
 39 はんへら 40 を 41 にても 42 うたにまこと 43 にてめとめをきつと見あ  
 わせてしたふりをしてあたりけるか  
 【第三段】  
 12ウさてけんしのゑといひ  
 して、源氏の絵と言ひ  
 し人す、み出て申さ  
 し人、進み出て申さ  
 れけるは御うらのあわさる  
 れけるは、「御占の合わざる

事はさておきぬ<sup>2</sup>。言語道  
 たん・き、<sup>3</sup>「3ウ」事にて候<sup>4</sup>・そ  
 れか  
 しちと又<sup>5</sup>たつね申度こ  
 と候<sup>6</sup>かまへてくねんころ  
 に御<sup>8</sup>うらなひ候てたまはり  
 候へ<sup>9</sup>「挿絵2」「4オ」人たかへ  
 にてはいかやうな  
 人ぞよくくふしん<sup>11</sup>・は  
 れ候<sup>12</sup>やうにちやうもん申  
 候はんた<sup>13</sup>、しまことの御大  
 事を御<sup>14</sup>とい候は、見しやうの  
 13才御<sup>15</sup>か、みをしんけい<sup>16</sup>とし  
 てあかめ奉り<sup>17</sup>さて持て候  
 此御前<sup>18</sup>にていきりやうし  
 りやう人間<sup>19</sup>ちくるいふつ  
 しん三<sup>20</sup>ほういつれにても・い  
 のりし<sup>22</sup>にあらはれすと  
 いふ事<sup>24</sup>なし御<sup>24</sup>たつね候人  
 をた<sup>25</sup>、いま此か、みのかけに  
 いのり出し候<sup>27</sup>て人く<sup>28</sup>にき  
 とくを見せ申さうする<sup>28</sup>  
 にて候<sup>29</sup>まつたつねんきやう  
 「4ウ」<sup>30</sup>りきをいれ奉りしんけい<sup>31</sup>  
 の御前<sup>32</sup>にてちとか、みの  
 13ウ<sup>33</sup>いとくを申さうする<sup>34</sup>にて

事はさておきぬ。言語道  
 断、聞き事にて候。それが  
 し、ちと、又、尋ね申度事  
 候。構へてく懇ろ  
 に御占<sup>1</sup>ひ候て給はり  
 候へ。人違へにては、いかやうな  
 人ぞ。よくく不審晴  
 れ候やうに聴聞申  
 候はん「ただし、誠の御大  
 事を御問<sup>1</sup>い候はば、見性の  
 御鏡<sup>2</sup>を神鏡とし  
 て崇め奉り、さて、持ちて候。  
 此御前にて、生霊、死  
 霊、人間、畜類、仏  
 神三宝、いづれにても祈  
 りしに現れずと  
 いふ事なし。御尋ね候人  
 を、只今、此鏡の影に  
 祈り出し候て、人々に奇  
 特を見せ申さうする  
 にて候。まず、たつねん行  
 力を入れ奉り、神鏡  
 の御前にて、ちと、鏡の  
 威徳を申さうするにて

候そもく<sup>1</sup>か、みはこれしちい  
 きてうていの本しゆあま  
 てる御神<sup>35</sup>の御かけをないし  
 所にうつし給ふより此かた  
 しんけい<sup>37</sup>のいくわう<sup>38</sup>ほからか  
 にしてちよくせのやみを  
 てらし給ふものをやとをく  
 しやうこをあんするにくわ  
 うていはしんけい<sup>40</sup>をかけてつ  
 ゐにしゆふ<sup>41</sup>か<sup>42</sup>いをしたかへた  
 「5オ」まふ<sup>43</sup>三<sup>43</sup>くわんにきやうさう  
 ぬん<sup>44</sup>ゆふのたとへ有<sup>46</sup>けこん  
 14才に十<sup>45</sup>きや・一<sup>46</sup>とうをあらはし<sup>47</sup>  
 かのやうめいせんしは<sup>48</sup>・心を  
 みやうきやう<sup>49</sup>のうてな<sup>50</sup>にた  
 とふ  
 年をへて花のか、みと  
 なる水はちりか、るをや  
 くもるといふらん  
 ふしきやかのむらさきの上  
 のすまのわかれをかなしみ<sup>50</sup>  
 てか、みを「5ウ」<sup>51</sup>見てもなくさ  
 みてましとよみ給ひし  
 いにしへの事<sup>52</sup>の・心<sup>53</sup>にうかみ  
 出たるはあはれひかるけん  
 14ウ<sup>54</sup>しの御事を御たつね候御

候。抑も、鏡は、これ、日域、  
 朝廷の本主、天  
 照御神の御影を、内侍  
 所に写し給ふより、此かた、  
 神鏡の威光、朗らかに  
 にして、濁世の闇を  
 照らし給ふものをや。遠く  
 上古を案ずるに、皇  
 帝は、神鏡を掛けて、遂  
 に、周回を従へ給  
 ふ。三<sup>1</sup>くわんにきやうさう  
 ぬん<sup>2</sup>ゆふの譬へ有り、華嚴  
 に十<sup>3</sup>きや一<sup>4</sup>とうをあらはし、  
 かのやうめいせんしは心を  
 明経の台に譬  
 とふ。  
 年を経て花の鏡と  
 なる水はちりか、るをや  
 曇るといふらん  
 不思議や、かの紫上  
 の須磨の別れを悲しみ  
 て、「鏡を見ても慰  
 みてまし」と詠み給ひし、  
 古への事の心に浮かみ  
 出たるは、あはれ、光源  
 氏の御事を御尋ね候。御

さんけあれなをくせい  
 せいを出し・いのりあらは  
 し申さん・それまいきやう  
 にてらさすしてゑいき  
 やうにてらしちよく水  
 にか、みす・して清水に  
 か、見るこれよくみかき  
 すめるによつてなりしか  
 るにわれくきみやうのた  
 なこ、ろをあわせてけう  
 きやうくわうとおの、きし  
 ようくらんけいしゆとかや  
 15才「6才」さいはいくとふしおか  
 み申て申さくねかはくは  
 はやく一めんのか、みのうち  
 にいまとふら・ふはうれいの  
 かたちをあらはし・たち所に  
 しようんのふしんをあきら  
 め給へしかれはすなはちた  
 つぬる所のむかしかりはこ  
 れかたしけなくもしんむ  
 くわうていの御すゑちせいふ  
 さうのけんくん御名をはわざ  
 と申ましかの物かたりの  
 はしめにもいつれの御とき  
 15ウにかありけんにつくりかく

懺悔あれ、なをく、精  
 誠を出し祈り現  
 し申さん。それ、まいきやう  
 に照らさずして、ゑいき  
 やうに照らし、濁水  
 にかがみずして、清水に  
 かがみる。これよく磨き  
 澄めるによつてなり。しか  
 るに、我々、きみやうの掌  
 を合わせて、けう  
 きやうくわうとおののき、し  
 ようくらんけいしゆとかや、  
 さいはいくと伏し拝  
 み申して申さく、「願はくは、  
 早々、一面の鏡のうち  
 に、今、訪ふ亡霊の  
 形を現し、たちどころに、  
 諸人の不審を明ら  
 め給へ。しかれば、すなはち、尋  
 ぬるところの昔語りは、こ  
 れ、かたじけなくも、神武  
 皇帝の御末、治政扶桑  
 の元勳、御名をば、わざ  
 と申まじ。かの物語の  
 はしめにも「いづれの御時  
 にかありけん」と作り隠

したる事なればさうな  
 くいかに・あらはさん猶もふ  
 しん「6ウ」にましまさはわかみ  
 をひかるけんしの御すかた  
 にいのりなしのか、みの  
 みかけにうつして人く  
 に見せ申さんとて雲・かく  
 れせし夜半の月ひかり  
 を又やあらはさんとをし  
 かへしく三とまでうたひ  
 ければまのあたりなるか、  
 みのかけにあふきにかける  
 ぬのことくなる  
 上らう  
 なをし  
 かふりを  
 ちやくし・見えける  
 事そ  
 なる  
 16ウ (挿絵3)  
 1 ひあわぬ 2 を 3 の 4 こそ 5 へ 6 又ちと 7 これ 8 ナシ 9  
 ナシ 10 の来りたまふらん 11 を 12 か 13 とて 14 ひ 15 つれく 16 き  
 やう 17 ナシ 18 れ 19 れ 20 ナシ 21 候へ 22 さふらふ 23 わ 24 候はず

したる事なれば、左右な  
 くいかにで表さん。猶も、不  
 審にましまさば、我身  
 を光源氏の御姿  
 に祈りなし、かの鏡の  
 御影に映して人々  
 に見せ申さん」とて、「雲隠  
 れせし夜半の月、光  
 を、又や、現さん」と押し  
 返し、三度まで唱ひ  
 ければ、目の当たりなる鏡  
 の影に、扇に描ける  
 絵の如くなる  
 上臈、  
 直衣  
 冠を  
 著し、見えける  
 事ぞ  
 不思議  
 議  
 なる。

25も 26上 27あらはし 28へき 29ナシ 30をこなふちから 31る 32  
 きやう 33き 34ん 35ナシ 36ひし 37きやう 38ふ 39せ 40せいわ  
 のきに 41ひ 42うけ 43うのたいそうは人をもつてか、みとせしゆゑにてん  
 かみな七とくのほまれうたいきあはうきうにたひしか、みすひとさんのふかきあ  
 とたれかはか、みをしやうせさらんし 44え 45う 46に 47す 48しやう  
 のろくをあつしめしんしやうおうやうは 49ナシ 50たまひ 51め 52はのふ  
 と 53ナシ 54ひいつか 55な 56せひく 57て 58するにて候 59みや  
 う 60ナシ 61いか 62ま 63をみな 64見てけるとすちるとに世うらに  
 65ナシ 66やうくとをそれ 67うやまい 68ひ 69を 70へ 71ひたま  
 72て 73ナシ 74ひ 75いわひ申ま、 76ナシ 77ナシ 78まふ 79か 80  
 ナシ 81ナシ 82こ 83ナシ 84た 85か 86ナシ 87に 88ナシ 89て  
 90こ 91れ

【第四段】

17才人くきたいふしきのお  
 もひをなして見るところ  
 に花鳥はか、みにうつされ  
 けるひかるけんしにかはり  
 て申やうこ「7オ」れはきりつほの  
 てんわう第二の御子六条  
 の院と申せしはわか・こと  
 なりたやすくなのらしと・  
 おもへとも雲かくれせし  
 夜半の後・あひつりく  
 のつみにしつみていまたう  
 かむたよりもなしされは

人々、稀代不思議の思  
 ひをなして見るところ  
 に、花鳥は、鏡に映され  
 ける光源氏に代はり  
 て申やう、「これは、桐壺の  
 天皇第二の御子、六条  
 の院と申せしは、我が事  
 なり。たやすく名乗らじと  
 思へども、雲隠れせし  
 夜半の後、愛別離苦  
 の罪に沈みて、いまだ浮  
 かむ便りもなし。されば、

有し代の事とも物かたり  
 17ウして御みつみをほろほし  
 さんけのくどくにひかれて  
 みつのくけんをもまぬかる  
 るたよりもやと、いま  
 のやうにか、みのかけにあら  
 はれたりこれ又たしやう  
 のゑんなるによつてなり  
 人くかまへてあととふらひ  
 てたひ給へさいしやうさん  
 「7ウ」け申さん我・とし三つと  
 申せし秋のころ御は、  
 かうみにおくれたてまつる  
 なみたをそへていと、し  
 18オく虫の音しけきあさちふ  
 の露けき宿をおもひいた  
 し小はきかもとのさひし  
 さまて「8オ挿絵3」「8ウ」はこく  
 み給ひし御  
 めくみのいともかしこきちよ  
 くによりけんしのしやう  
 を給はつて十二にてけんふく  
 しかうらいこくのさうにん・  
 ひかると申なつけし  
 よりひかるけんしとなに  
 よはるは、き、のまきに

有りし代のことども物がたり  
 して、御身罪を滅ぼし、  
 懺悔の功德にひかれて、  
 三つの苦患をも免る  
 る便りもやと、只今  
 のやうに、鏡の影に現  
 れたり。これ、又、多生  
 の縁なるによつてなり。  
 人々、構へて後弔ひ  
 て賜ひ給へ。罪障懺  
 悔申さん。我、年三つと  
 申せし秋の頃、御母  
 更衣に後れ奉る。  
 涙をそへて、いとどし  
 く、虫の音繁き浅芳生  
 の露けき宿を思ひ出  
 し、小萩がもとの寂し  
 さまで、育み給ひし御  
 恵みのいともかしこき勅  
 により、源氏の姓  
 を賜はつて、十二にて元服  
 し、高麗国の相人、  
 光と申す名をつけし  
 より、光源氏と名に  
 呼ばる。帯木の巻に

中将おんかのまいのいしやう  
によりもみちのかのまき

18ウにしやう三位あふひのまき

に大しやうさか木はのま

きに御とし廿二にて御ち、

みかとおくれたてまつり

かの花のゑんの春の夜の

ゆくゑもしらて入月のお

ほろげならぬちきり「9オ」ゆへ

とし廿五と申せし時つづ

くにすまのうらにうつさ

れてあまりなけきの身

にしみて又の年の春はり

まのあかしにうらつたひし

19オたりなくさむかたもなしさ

るにても三とせまでも

すまのうらさひしさ何

としはのやのしはしか程

もなくさますうらもま

ちかきあしかきや竹あめ

るかきの内にしておきふし

なにとすかむしろならば

ぬかたのすまひして人は

なれなる里なればみやこ

のたよりもあらはこそなみ

中将、御賀の舞のいしやう  
により、紅葉賀の巻

に正三位、葵の巻

に大将、柳葉の巻

に、御年廿二にて、御父

帝に後れ奉り、

かの花の宴の春の夜の、

行方も知らで入月のお

ほろげならぬ契りゆへ、

年廿五と申せし時、津の

国須磨の浦に移さ

れて、あまり嘆きの身

にしみて、又の年の春、播

磨の明石に浦づたひし、

間はず語りの夢をさへ、語り

慰むかたもなし。さ

るにても、三年までも

須磨の浦、寂しさ何

と柴の屋の、しばしが程

も慰まず、浦も間

近き葦垣や、竹編め

る垣の内にして、起き臥し

何と菅筵、習は

ぬかたの住まひして、人離

れなる里なれば、都  
の便りもあらばこそ、涙

たにくもる月の「9ウ」かほなかめ  
ふ

19ウねをなかめつ、しほやくけ

ふりに身をいためしはと

いふ物おりしきておもひ

をすまの山おろしうへのに

かよふしかの音もうしろの

山にほどちかきなみこ、も

とにふる雨はうしほのお

つるこゑなれやたひころも

うらかなしくも見たたせ

はあわちしま山ほの見え

てたかすむ里そまきのと

のちかまさりせぬすまるま

ておもひのこさぬ事もな

20オしなきさのとまやにをと

するはともよひかはすとも

ちとりあま「10オ」の戸た、く

くゐなのこゑひちかき雨の

しめくとおもひのそ、てのい

つとなくをととき、なる、

たかしほのか、るめをのみ

見てすきしおもひやせめ

てなくさむとうつしうへ

けるわか木のさくらさけ

に曇る月の顔、長雨降  
る夜の明ほのに、小さき舟

を眺めつつ、塩焼く煙

に身を痛め、柴と

いふ物折り敷きて、思ひ

を須磨の山おろし、上野に

かよふ鹿の音も、後ろの

山にほど近き、波こも

とに降る雨は、潮の落

つる声なれや。旅衣、

うら悲しくも見たたせ

ば、淡路島山ほの見え

て、誰が住む里ぞ楨の

戸の、近まさりせぬ住居ま

で、思ひ残さぬこともな

し。渚の苦屋に訪

ずるは、友呼び交わす友

千鳥、海人の戸叩く

くゐなの声、肘笠雨の

しめくと、思ひの袖のい

つとなく、音聞、慣るる

高潮の、かかる目をのみ

見て過ぎし、思ひやせめ

て慰むと、移し植へ

ける若木の桜、咲け

とも花はる中にてす

むわれさへにいつしかに山  
かつめきてひなひとのし

20ウのふみやこのかたみにもみ

のひのほらへなて物おくり  
物にもふぶのねもひくた  
まこともさすかなりさる

ほどに天下ふしきのつけ

ありてほどなくみやこへめし  
かへされもとのくらゐにあ  
らたまり「10ウ」かすよりほかの

大納言になる其後うち  
つゝきみをつくしのまき

に・大政大臣藤のうらは  
のまきに大将ふかくたの  
しみをきはめしにむら

21才さきのうへのわかれよりひ

かりをかくすいなつまの程  
なきゆめの世の中に色を  
たしなみかをかさりたかき

いやしきをしなへてぬし  
ある人・もぬしなき・もかく

れあらはれおもはせし女の  
おもひやつもりけんおもふ人  
にもとくわかれてのちの世

「11才」までもくるしむこそわか

ども花は田舎にて、住

む我さへに、いつしかに、山  
賤めきて、鄙人の、忍ぶ

都の形見にも、巳

の日の祓、撫で物、贈り  
物にも、笛の音も、弾く玉  
琴もさすがなり。さる

ほどに、天下不思議の告げ  
ありて、ほどなく都へ召し  
返され、元の位にあ

らたまり、数より外の  
大納言になる其後、うち

つづき、滯標の巻  
に太政大臣、藤裏葉

の巻に大将、深く紫  
しみを極めしに、紫

上の別れより、光  
を隠す稲妻の、程

なき夢の世の中に、色を  
嗜み、香を飾り、高き

卑しきをしなべて、主  
ある人も主なきも、隠

れ現われ思はせし、女の  
思ひや積もりけん。思ふ人  
にも疾く別れて、後の世

までも苦しむこそ、我が

身なからもおろかなれと

かれうひんのごをあげな  
きつくときつかりければ

21ウ聞人みなおもしろくあは

れに又はふしきにおもひけ  
る所にいもうとの風月は  
けしきすこしうつゝ、なき

ふせいであれく見給へ  
か、みのかけにわらはもあ

らはれ出たるはつかしや  
すゑつむ花のかすならぬ

おもひの色にいてふよく  
とをしかへしく二三へん

うたひければあふきにかける  
「11ウ」女のごとく・くちおほひし  
てひかるけんしのかけに

22才たちそひうらみかほに見

えけるこそふしきなれ其  
時けんしの御かけすこし

たちざり給ふと見えて  
かの女申けるは君はいづくへ  
とてをはするそ此世にてこ

そうとまれ参らせさふら  
ふともめいとにてはあひ  
ねん・しうしんのおにとな

りてかけのごとくにそひ

身ながらも愚かなれ」と

迦陵頻の声をあげ、泣  
きつ口説きつ語りければ、  
聞く人、皆、面白く、哀

れに、又は、不思議に思ひけ  
るところに、妹の風月は、

気色少し現なき

風情にて、「あれく見給へ、  
鏡の影に姿も現  
れ出たる。恥づかしや」

「末摘花の数ならぬ  
思ひの色に、いでふよく」

と押し返し、二三遍  
唱ひければ、扇に描ける  
女のごとく口覆ひし

て、光源氏の影に  
立ち添ひ、恨み顔に見  
えけるこそ不思議なれ。其

時、源氏の御影、少し  
立ち去り給ふと見えて、

かの女申けるは、「君はいづくへ  
とてをはするぞ。此世にてこ

そ疎まれ参らせ候  
とも、冥土にては愛

念執心の鬼とな  
りて、影のごとくに添ひ、

かたちのごとくにはなるま

しき物をと申けるさる

ほとに花鳥はけんしのす

22ウかたにかは「12オ」りてものをゆい  
風<sup>126</sup>

月はすゑつむ花のゆふれひ<sup>127</sup>

にかはりてもんたうすその

ときけんしの大將の給ひ

けるは「挿絵4」「12ウ」そもく<sup>129</sup>・い

かなる人に

てましませば見たりとも<sup>130</sup>

なき人のすかたかなおもは<sup>131</sup>

ゆくはつかしければこそく

ちおほいをはし給ふらめこ

れほと・人<sup>133</sup>く<sup>134</sup>の御らんする

に見くるしき御ふるまひ<sup>135</sup>

やとくく<sup>135</sup>たちさり給ふ

23オ（挿絵4）

（挿絵4）

形のごとくに離るま

じき物を」と申ける。さる

ほとに、花鳥は源氏の姿

に代はりて物を言い、風

月は未摘花の幽霊

に代はりて問答す。その

とき源氏の大將の給ひ

けるは、「抑も、いかなる人に

てましませば、見たりとも

なき人の姿かな。面映ゆ

く恥ずかしければこそ口

覆いをばし給ふらめ。こ

れほど人々の御覧する

に、見苦しき御ふるまひ

や。疾くく<sup>135</sup>立ち去り給ふ

べし<sup>131</sup>

- 1 ひ
- 2 ナシ
- 3 ナシ
- 4 ナシ
- 5 ナシ
- 6 御
- 7 は
- 8 ナシ
- 9 ナシ
- 10 は
- 11 ふ
- 12 ほろ
- 13 ナシ
- 14 より
- 15 すこしつみ
- 16 れんかために
- 17 ひ
- 18 御
- 19 ナシ
- 20 を
- 21 り
- 22 る
- 23 き
- 24 さ
- 25 にあけくら
- 26
- ナシ
- 27 ナシ
- 28 す
- 29 ひ
- 30 こまうとくといひしもの
- 31 御子
- 32 を
- 33 ナ
- シ
- 34 信
- 35 ナシ
- 36 を
- 37 こ
- 38 え
- 39 に
- 40 す
- 41 ナシ
- 42 に
- 43 ナ
- シ
- 44 人か
- 45 を
- 46 つ
- 47 つき
- 48 ナシ
- 49 人
- 50 ほ
- 51 ナシ
- 52 ナシ

- 53 ナシ
- 54 を
- 55 わ
- 56 け
- 57 ひ
- 58 に
- 59 ナシ
- 60 を
- 61 ナシ
- 62 ねは
- 63 く
- 64 を
- 65 ナシ
- 66 は
- 67 ふかき
- 68 ける
- 69 ひ
- 70 さへつる
- 71 を
- 72 へ
- 73 ナシ
- 74 ナシ
- 75 かる
- 76 ナシ
- 77 ナシ
- 78 は
- 79 ひや
- 80 を
- 81 そ
- 82 え
- 83 ら
- 84 かす
- 85 ま
- 86 にあふきなる事
- 87 に
- 88 ひ
- 89 の
- 90 り
- 91 ほ
- 92 なひ大しんをとめのまきに
- 93 大しやうてんわう
- 94 わ
- 95
- ゆへ
- 96 へ
- 97 く
- 98 ほ
- 99 に
- 100 に
- 101 へつし
- 102 かしけ
- 103 御
- 104 御
- 105 わ
- 106 ナシ
- 107 ひ
- 108 い
- 109 り
- 110 を
- 111 こま
- 112 ナシ
- 113 に
- 114 を、
- 115 いか、み
- 116 ナシ
- 117 すみよしかは
- 118 ナシ
- 119 おわ
- 120 ナシ
- 121 の
- 122
- た
- 123 を
- 124 い
- 125 く
- 126 いひ
- 127 い
- 128 な
- 129 御みは
- 130 すそ
- 131 ひ
- 132 を、ひ
- 133 に
- 134 ナシ
- 135 ナシ

【第五段】

【第五段】

23ウ 其時風月我をはたれとも<sup>1</sup>

しらぬとやしらすは御心し<sup>2</sup>

り・<sup>3</sup>のたゆふ・<sup>4</sup>みやうふにとはせ<sup>5</sup>

給へ・<sup>6</sup>さて・<sup>7</sup>ひたちのみやの御

むすめかやわれ中<sup>8</sup>、に<sup>9</sup>六

条・<sup>10</sup>院にはんへりしに<sup>11</sup>あ

またのかすには入しかと<sup>12</sup>

も「13オ挿絵5」「13ウ」なさへいや<sup>12</sup>

しきよもき

ふのかれく<sup>13</sup>なりしちきり

のすゑうらめしければ人

しれす・<sup>13</sup>ねたき心はありし<sup>14</sup>

かともた、かすならぬ身

にはちてしらすかほにて

其時、風月、「我をば、誰とも

知らぬとや。知らずは、御心知

りの太夫命婦に問はせ

給へ」「さて、常陸宮の御

娘かや」「われ、中、に、六

条院に侍べりしに、数多

の数には入りしかと

も、名さへ卑しき蓬生

の、かれく<sup>13</sup>なりし契り

の末、恨めしければ、人

知れず妬き心はありし

かども、ただ数ならぬ身

に恥て、知らず顔にて

24才きてすきぬしやうをはたと  
 へへたつともあひねんのき  
 つなきれされはなをうき人  
 につきそはんあらはなるまし  
 のわか身やとてなをも御  
 身にそひ給へは大将の給ひ  
 けるはかのいせのみやす所を  
 こそ物かたりのおもても「14才」  
 ね  
 たき心のをせしとてう  
 たてしき事には申たれ  
 すゑつむ花の御事は御もの  
 ねたみしたりともかのもの  
 かたりには見えぬものをや  
 24ウされはなにの御うらみにこれ  
 まてはきたり給ふらんはや  
 く御かへり候へや・物ねたみ<sup>24</sup>  
 にこそあらねともいまの世  
 まてもすゑつむ花とてわ  
 らはれくさになりし事は<sup>27</sup>  
 たれゆへそ  
 くれなるのはなそあやな  
 くうとまるれむめ<sup>28</sup>のた  
 ちえはなつかしけれと  
 とよみ給ふ時の御いせいの<sup>31</sup>  
 つかしき

さて過ぎぬ。生をば、たと  
 へ隔つとも、愛念の絆、  
 切れざれば、なほ、憂き人  
 に付き添はん。露、離るまじ  
 のわが身や」とて、なほも御  
 身に添ひ給へば、大将の給ひ  
 けるは、「かの伊勢の御息所を  
 こそ、物語のおもても、妬  
 たき心のをせしとて、う  
 たてしき事には申され。  
 末摘花の御事は、御物  
 妬みしたりとも、かの物  
 語には見えぬものをや。  
 されば、何の御恨みに、これ  
 まてはきたり給ふらん。早  
 く、御帰り候へや」「物妬み  
 にこそあらねども、今の世  
 までも末摘花とて、笑  
 われ草になりし事は、  
 誰故ぞ。  
 紅の花ぞあやな  
 くうとまるれ梅のた  
 ちえはなつかしけれと  
 と、詠み給ふ時の御威勢のは  
 つかしき。

なつかしき色ともなし  
 25才に「14ウ」なに、このすゑつむ  
 はなをそてにふれけん  
 とよみ給ふ此うたゆへにこそ  
 すゑつむ花ともなをえた<sup>37</sup>  
 れ見たりともなきすかた  
 かなとはあらうらめしの  
 ことのはや出て過たるこ  
 となれとも物ねたみして  
 すきぬるはあふひのうへとき  
 こえしはせつしやう殿の  
 御むすめいとやことなき人  
 のさまをあさましとのみお  
 もひしに夕霧の君をまふ<sup>43</sup>  
 25ウけをきほとなくかくれ給ひ  
 し「15才」うれしさよむらさきの  
 うへと申せしはゆかりのくさ<sup>44</sup>  
 をたつねいて、いとけなき  
 よりむかへとりはこくみ給  
 ひし事なれば御心さしも  
 たくあなく又たちならふ  
 人もなし時めき給ふ御事を<sup>47</sup>  
 うらやましくのみおもひし<sup>49</sup>  
 ほとにわかなのまき・にうせ<sup>51</sup>  
 給ふ世の中さはきなきし<sup>52</sup>  
 かともわれはさほともなき<sup>53</sup>

なつかしき色ともなし  
 になに、この末摘  
 花を袖にふれけん  
 と詠み給ふ、この歌故にこそ、  
 末摘花とも名を得た  
 れ。「見たりともなき姿  
 かな」とは、あら恨めしの  
 言の葉や。出て過たるこ  
 となれども、物妬みして  
 過ぎぬるは、葵の上と聞  
 こえしは、摂政殿の  
 御娘、いとやむごとなき人  
 の様を、浅ましとのみ思  
 ひしに、夕霧の君をまふ  
 け置き、ほどなく隠れ給ひ  
 し嬉しさに、紫  
 上と申せしは、縁の草  
 を尋ね出て、いとけなき  
 より迎へ取り、育み給  
 ひし事なれば、御志しも  
 類なく、又、立ち並ぶ  
 人もなし。時めき給ふ御事を、  
 羨ましくのみ思ひし  
 ほどに、若菜の巻に失せ  
 給ふ。世の中、騒ぎ嘆きし  
 かども、我は、さほども嘆

かれす花ちるさと、きこへ<sup>54</sup> | 55  
 26才しはれいけいてんの御いも・と<sup>56</sup>  
 いとがすならてましませ「15ウ」は<sup>58</sup> | 57

わか身におもひしられつ、  
 いとをしやとはおもへともよ  
 かれとまではおもはれすあ  
 かしのうへ・はちうくの御は、<sup>61</sup>  
 めてたきにつけてもあな

つりにく、なりゆけはき、み  
 るたひにすさまじや六条<sup>62</sup>  
 のみやす所は物のけにさへあ  
 らはれてよろつ人のあた<sup>63</sup>  
 となる心ふかさのうとまし<sup>64</sup> | 65 | 66  
 さなにとおもふと此人をにく<sup>67</sup>

みやはち、みかとのことにな  
 しみ給ひてかのうき人に  
 ゆつりし「16才」にゑもんのかみの  
 おもふ事けふりくらへにあら  
 はれて御心にもいれされは人  
 にはいはす心にはおかしとき<sup>71</sup> | 72 | 73  
 きてさてすきぬさてふち<sup>74</sup>  
 つほとおほろ月夜の御事は  
 とりわきことににくけれど<sup>75</sup>  
 ひかりか、やくたまのきす<sup>76</sup>  
 ゆいちらさんもなさけなし<sup>77</sup> | 78

かれず。花散里と聞こへ  
 しは、麗景殿の御妹、  
 いと数ならてましませば、

我が身に思ひしられつ、  
 愛をしやとは思へども、よ  
 かれとまでは思はれず。明  
 石の上は中宮の御母、  
 めてたきにつけても、あな  
 づりにく、なりゆけば、聞き見  
 るたひにすさまじや。六条

御息所は、物の怪にさへ現  
 れて、万の人の仇  
 となる。心深さの疎まし  
 さ、何と思ふと此人を、憎  
 までは如何あるべき。女院の  
 宮は、父帝の殊に悲  
 しみ給ひて、かの愛き人に  
 譲りしに、衛門督の  
 思ふ事、煙比べに現  
 れて、御心にも入れざれば、人  
 には言はず、心には「おかし」と聞  
 きて、さて過ぎぬ。さて、藤

壺と臘月夜の御事は、  
 とりわき殊に憎けれど、  
 光輝く玉の疵、  
 言い散らさんも情けなし。

さすがに人の御ためにいた<sup>79</sup>  
 27才しはれはよかたりに人も  
 こそきけ申まし中に

もの、にくかりしは夕か  
 ほのうへの御かたみたまかつら  
 のないしはやうくとかし<sup>81</sup> | 82  
 つき「16ウ」よるは夕やみのころ。<sup>83</sup>  
 か、り

火すこくとほさせて引さす<sup>84</sup> | 85  
 ことをまくらとし御うた、  
 ねのつれなさようつせみのあ<sup>87</sup> | 88  
 まのきはのをき・かすにも<sup>89</sup> | 90  
 あらぬ人までもさる・そと<sup>91</sup>  
 きけは人しれすしつとの心  
 ほのをとなりてむねをやき

27ウ あひねんのほむら身をこか  
 す又うちかへしあんすれば  
 もの、ねたきもたれゆへそ  
 よし何事もうち捨て・う<sup>92</sup> | 93  
 らみはす多もとをらしやせ  
 めてうらみにことよせて「17才」恋<sup>94</sup>  
 しき人を見るやとてか、み  
 によりてかけみればあたり  
 もひかる御かけのほひみ  
 ちたるそのそはに又わかか<sup>96</sup> | 97  
 けをならふれはす、きあ

さすがに、人の御ために、いた  
 はしければ、世語りに、人も  
 こそ聞け、申まじ。中に

も、ものの憎かりしは、夕顔  
 上の御かたみ、玉鬘  
 内侍は養君と傳  
 づき、夜は夕闇の頃、簪

火すこく灯させて、弾きさす  
 琴を枕とし、御うた、  
 寝のつれなさよ。空蟬の尼  
 の軒葉の荻、数にも  
 あらぬ人までも、さるぞと  
 聞けば、人知れず、嫉妬の心、  
 炎となりて胸を焼き、  
 愛念の焰、身を焦が  
 す。又、打ち返し案ずれば、  
 物の妬きも誰ゆへぞ、  
 よし何事も打ち捨て、恨  
 みは末も通らじや。せ

めて恨みに事寄せて、恋  
 しき人を見るやとて、鏡  
 に寄りて影見れば、あたり  
 も光る御影の、匂ひ満  
 ちたるその傍に、又、我が影  
 を並ぶれば、煤き垢

かめるこうちきのふるきの  
かわきぬうへにきてふけんほ  
28才さちののり物とかきと、め

られし筆のあと・いま身に  
おもひしられたりはつかし  
ければ此日ころのあひねん  
のきつなおもひきり・過にし  
かたのはつかしさをわれと  
心にさん「17ウ」けしてこうくわい

のなみたせきあへすと袖を  
しほりて申しければ大将の給  
ひけるは・やさしくもおほし  
めしよられて候ものかなそも  
く御身をはいまたたつね  
申人もなしなにしにこ

28ウれまではきたりたまふそや  
君はいまたしろしめさす  
やた、いまふしんをなさる、  
あふきのゑはいつそや雪のあ  
したの御かへりにこうしの  
雪をはらはせて

ふりにけるかしらの「18才」雪  
を見る人もとらず  
ぬらすあさの袖かな  
とよみ給ひし時わらはも  
ろともにみすのもとまで

める小桂の、黒貂の  
皮衣、上に着て、普賢菩薩  
の乗り物と、書き留め  
られし筆のあと、今、身に  
思ひ知られたり。恥ずかし  
ければ、此日頃の愛念

の絆、思ひ切り、過ぎにし  
方の恥ずかしさを、我と  
心に懺悔して、後悔  
の涙、塞ぎ敢へず」と、袖を  
絞りて申しければ、大将の給  
ひけるは、「優しくも思し  
召しよられて候ものかな。抑

も御身をば、いまだ尋ね  
申す人もなし。何しにこ  
れまでは来たり給ふぞや」  
「君はいまだしろし召さず  
や。只今、不審をなさるる  
扇の絵は、いつぞや、雪の朝  
の御帰りに、格子の

雪を掃はせて、  
降りにける頭の雪  
を見る人もとらず  
ぬらす朝の袖かな  
と詠み給ひし時、妾も  
ろともに御簾のもとまで、

さそはれ出たりし・をかき  
たるゑにてさふらへは此ゑ  
29才のたよりにあらはれ出日比の  
うらめしさを申なりこ  
れ「18ウ」まてなれや人く・いと  
ま申てかへるなり只今かた  
り申事ともはさいしやう  
さんけのゑんとなりほたい  
のたねとなしたまへこれも  
たしやうのゑんとおほしめし  
あととふらひてたひたまへと  
なみたをなかし申ければか、  
みに見えしかけもなく  
風月はもとの心になりて  
ゆめのさめたる・ことくなり  
29ウさる程に人くはきとくの  
おもひをなしていまたけん  
しの御かけはか、みに有て花  
鳥はいまたゆうれいの  
の「19才」きたる  
ふせい  
も

誘はれ出たりしを、描き  
たる絵にて候へば、此絵  
の便りに現はれ出で、日頃の、  
恨めしさを申なり。こ  
れまでなれや、人々、暇  
申て帰るなり。只今、語  
り申す事どもは、罪障  
懺悔の縁となり、菩提  
の種と成し給へ。これも、  
多生の縁と思し召し、  
後弔ひて賜ひ給へ」と、  
涙を流し申ければ、鏡  
に見えし影もなく、  
風月は元の心になりて、  
夢の覚めたる如くなり。  
さるほどに、人々は奇特の  
思ひをなして、いまだ源  
氏の御影は、鏡に有りて、花  
鳥は、いまだ幽霊の  
のきたる  
風情  
も、

なかり  
けり「挿絵6」  
（挿絵5）

なかり  
けり  
（挿絵5）

なかり  
けり  
（挿絵5）

なかり  
けり  
（挿絵5）

1 ナシ 2 こ 3 か 4 の 5 ひ 6 あら 7 は 8 ナシ 9 我二 10 の  
 11 て 12 き人 13 に 14 の 15 たとひしやうをは 16 ひかた 17 を 18 み  
 19 わ 20 ナシ 21 ナシ 22 そ 23 、 24 かたり 25 かくれ 26 いか 27 ナ  
 シ 28 ナシ 29 は 30 もはめたまひし 31 わせぬ 32 し 33 の 34 ひし御  
 35 ぬ 36 の 37 もぬ 38 ナシ 39 いくく 40 くるはんとて 41 ナシ 42 見し  
 ほと 43 う 44 すり 45 たし 46 ひなし 47 中 48 と 49 見 50 ナシ 51  
 やまひつきみのりのまき 52 のなけきさは 53 それ 54 ナシ 55 え 56 ひ  
 57 う 58 ナシ 59 かに 60 と申 61 かく 62 うらめ 63 わ 64 ナシ 65 御  
 心の 66 ナシ 67 ナシ 68 こらえん 69 さん 70 ナシ 71 ひはれ 72 も 73  
 ナシ 74 ま、は、の 75 けて 76 ひ 77 ひ 78 と 79 を 80 ナシ 81 は、  
 82 御ま、むすめなりしやうら 83 かとよ 84 し 85 も 86 にて 87 き 88 ナ  
 シ 89 ナシ 90 五せつのきみ 91 う 92 なき 93 、 94 か、みのかけにても  
 95 ナシ 96 ナシ 97 け 98 かわころも 99 つ 100 ナシ 101 も 102 つ、 103  
 ナシ 104 しつとのねんをひるかへし 105 ひ 106 あら 107 と 108 ナシ 109 ナシ  
 110 ナシ 111 しりたまはず 112 ナシ 113 まつ 114 ナシ 115 ナシ 116 そのほか  
 117 いたて 118 所 119 を 120 ナシ 121 よ 122 し事も 123 ひ 124 え 125 し  
 126 ナシ 127 え 128 る 129 ける 130 も 131 か 132 ナシ 133 も 134 もなおし  
 135 ナシ 136 ひ 137 れは

## 【第六段】

30ウ 「19ウ」はむろの中納言殿す、み

出ての給ふはさても有かた

ききゑんにて候ものかな此あふ

きのゑのふしんによりむか

しかたりにこそうけたま

はりし事ともをまのあた

## 【第六段】

葉室の中納言殿、進み

出ての給ふは、「さても、ありがた

き奇縁にて候ものかな。此扇

の絵の不審により、昔

語りにこそ承

りし事どもを、目の当た

りなる御かけを見奉るこ  
 とのふしきさよこれすな  
 はちたしやうくわうこうの<sup>9</sup>  
 しゆくゑんなれば御ほたいをは<sup>11</sup>  
 ねんころにとふらひたてま  
 つるへしなをく、此つゐ  
 てにかの物かたりのゑんとも<sup>12</sup>  
 31才をたつね申へしくわしく御・<sup>14</sup>  
 かたり候へやすきほどの・事<sup>15</sup>  
 何事にても候へたつね給へ<sup>16</sup>  
 と有しかは「20才」抑かのけんし<sup>17</sup>  
 の物かたりにはせいわうせん<sup>18</sup>  
 ていの御代・を何とあかせる<sup>20</sup>  
 そやこたへていわくまつ<sup>24</sup>  
 せんていの御事はさておきぬ<sup>25</sup>  
 きりつほのてんわうより  
 此かたはしめてしゆしやく<sup>26</sup>  
 ゐんれいせんゐんこんしやう<sup>27</sup>  
 しゆんくう五代の内をさた<sup>29</sup>  
 せりささきたちの御したい<sup>30</sup>  
 31ウまつしゆしやくゐんの御は  
 ははいかなる人にておはし  
 けるやらん二条のくわんはく  
 あく大臣の御むすめこう  
 きてんの「20ウ」くわうくう大こう<sup>31</sup>  
 きうこれなりれいせんゐん<sup>32</sup>

りなる御影を、見奉るこ  
 との不思議さよ。これ、すな  
 はち多生くわうこうの  
 宿縁なれば、御菩提をば、  
 懇ろに申ひ奉  
 るべし。なをく、此つゐ  
 でに、かの物語の縁ども  
 を尋ね申べし。詳しく御  
 語り候へ「易き程の事、  
 何事にても候へ、尋ね給へ」  
 とありしかば、抑も、かの源氏  
 の物語には、清和先  
 帝の御代を何とあかせる  
 ぞや」答へて曰く、「まつ  
 先帝の御事はさておきぬ。  
 桐壺の天皇より  
 此かた始めて、朱雀  
 院、冷泉院、今上、  
 春宮、五代の内を沙汰  
 せり」「后たちの御次第、  
 まづ、朱雀院の御母  
 は、いかなる人にておはし  
 けるやらん」「二条の関白、  
 悪大臣の御むすめ、弘  
 徽殿の皇后太皇后、  
 これなり」「冷泉院

の御は、はせんていの四のみ  
やうす雲の女院又はふちつ  
ほとまか、やく日のみやとも  
申なり33こんんしやうの御は、は  
左大臣の御むすめ34扱35しゆんく  
うの御は、は大しやうてんわ  
うなりしは36ひかるけんしの御  
32才むすめあかしのちうくうこ  
れなりさてまきのかすは六  
十てうこの内にふんしゆもん  
せんしきらいきもうし  
さてんかんしよしゆう37ゑき  
しやうしよきてんめう38ほ  
うのめうきやうの心をあかせ  
りまきのうちに「21オ」いま四五て  
うはなにとてたらぬぞやこた  
へていはくにんけん六十年  
のちやうみやうにかたとりて  
六十帖にかくといへとも人  
の命もさためてさため  
32ウ なきゆへによつてなり扱  
うたのかすは七百七十よしゆ  
此内44にま45んよう46こ47せん  
しゆきんようしくわとうの  
しゆうかめいかの心をとりて  
さまくにあかせり扱うち

の御母は「先帝の四の宮、  
薄雲の女院、又は、藤壺  
とも、輝く日の宮とも  
申なり」「今上の御母は」  
「左大臣の御娘」「扱、春宮  
の御母は」「太上天皇  
なりしは光源氏の御  
娘、明石の中宮、こ  
れなり」「さて、巻の数は六  
十帖、この内に、文集、文  
選、史記、礼記、孟子、  
左伝、漢書、周易、  
尚書、紀伝、明法  
の明経の心をあかせ  
り」「巻のうちに、いま四五帖  
は、何とて足らぬぞや」答  
へて曰く、「人間六十年  
の長命にかたとりて  
六十帖に書くといへども、人  
の命も定めて定め  
なき故によつてなり」「扱、  
歌の数は七百七十余首、  
此内に万葉、古今、後撰集、  
金葉、詞花等の  
秀歌名歌の心をとりて、  
さまくにあかせり」「扱、うち

十てうには50ひかりかくれ給ひ  
し後御まこのにほふひや  
うふきやうのみやと御子に  
かほる大将の御事をつく  
りそへたりおよそ源氏と  
申54は一葉まつちる55きりつ  
ほの秋のおもひ57をはしめ58  
33才にて名をのみ「21ウ」のこすは、き  
木の心59もし60らてたひねせ  
し中川なみたのかたかへ  
おもひ61・こりても62さてあらてな  
を人からぞなつかしきかたみ  
の袖を又ぬらす夕かほの露  
のきえしより人のいのちは  
お65・ひたるもわかむらさき  
もたのまれす心66お67さなき  
はこくみも見るかひ68有し69さ  
まなれやせい70かいはのまひ  
人のたちるにつけてわすれ  
ぬはもみちのかの御あそひ心  
かしき花の72ゑんかものみ  
あれ73のあふひ「22オ」草車をかさ  
るあらしも後はゆめと  
やなりぬらんかの野の宮のた  
ひ75ころも「えたをりしさか  
十帖には、光隠れ給ひ  
し後、御孫の匂兵  
部卿の宮と、御子に  
薫大将の御事を作  
り添へたり。およそ、源氏と  
申は、一葉まづ散る桐壺  
の、秋の思ひを初め  
にて、名をのみ残す帚  
木の、心も知らで旅寝せ  
し、中川涙の方違へ、  
思ひ懲りてもさてあらで、な  
を人からぞ懐かしき、形見  
の袖を又濡らす。夕顔の露  
の消えしより、人の命は  
生ひたるも、若紫  
もたのまれず、心幼き  
育みも、見る甲斐ありし様  
なれや。青海波の舞  
人の、立居につけて忘れ  
ぬは、紅葉賀の御遊び、心  
にかゝる藤壺の、あたりゆ  
かしき花の宴、賀茂の御  
生れの葵草、車を飾  
る争ひも、後の夢と  
やなりぬらん。かの野の宮の旅  
衣、一枝折し袖

- きはのかをなつかしみ吹風  
 や花ちるさとを過ぬらん猶  
 こりすまの物おもひ竹あ  
 めるかきの夜もすから月  
 にあかし77のうらつたひなを  
 身をつくしおもふゆへ80ひたり  
 やみきのゑあわせにあらそ
- 34才ひさはく松風のきえてい  
 つくにうす雲のけふりの  
 はてもあはれなり世はあ「22ウ」さ  
 かほの花の露名もしつま  
 しきおとめ87こかかたみにの  
 こすたまかつらわか身にし  
 むる梅かえの藤のうらはも  
 こきすきてわかなもおひ90  
 となりぬへしわれさきた、は  
 なきあとをとへかしはきは  
 かなくもゆめにつたへしよ  
 こふえのふきよはりたる山  
 風に夕霧はる、をの、里  
 風92に夕霧はる、をの、里  
 34ウそもくけうしゆしやく  
 そんはみりのりの道をたつねつ  
 つゆめまほろしの世をいと  
 ひつるにねはんの雲か「23オ」くれ  
 いさもろともさいしやうの  
 雲はあつくともさんけのく
- 葉の、香を懐かしみ吹風  
 や、花散里を過ぬらん。猶  
 こり須磨の物思ひ、竹編  
 めるかきの夜もすがら、月  
 に明石の浦つたひ、なを  
 身をつくし思ふ故、左  
 や右の絵合に、争  
 ひ騒ぐ松風の、消えてい  
 づくに薄雲の、煙の  
 果ても哀れなり。世は朝  
 顔の花の露、名もしつま  
 しき乙女子が、形見に残  
 す玉鬘、我が身にし  
 むる梅枝の、藤の裏葉も  
 こき過ぎて、若菜もおひと  
 なりぬべし。我、先立たば  
 亡き後を、とへかし萩のは  
 かなくも、夢に伝へし横  
 笛の、吹きよはりたる山  
 風に、夕霧はる、小野の里、  
 抑も教主釈  
 尊は、御法の道を尋ねつ  
 つ、夢幻の世を厭  
 ひ、遂に涅槃の雲隠れ、  
 いざ諸共に罪障の、  
 雲は厚くとも、懺悔の功

- とく、やみはれて心の月を  
 あらはさんうれしきかなや只  
 今のきやうけんき、よのた  
 はふれに花鳥風月を96えん  
 としてむしやうほたい97にいた  
 らしめんしやうしそくねはん  
 ほんなふそくほたい98ともいま  
 35才こそおもひさとりたれいと  
 ま申て人くとして花鳥さ  
 しきをたつと見えしか  
 はか、みのかけもきえはて  
 てみこもとの心になり  
 にけりこれを見きく人く  
 も夢ま「23ウ」ほろしのことくに  
 てうつ、ともさらにおもは  
 れすおもしろさといひき  
 とくといひ一かたならぬ102  
 しきなれば人くとりく  
 のさんたんなのめならず103  
 小袖十かさね  
 しやきん  
 百りやう  
 たま  
 はり105  
 てみこをは  
 すな
- 徳、闇晴れて、心の月を  
 現さん。嬉しきかなや、只  
 今の狂言聞き、世の戯  
 れに、花鳥風月を縁  
 として、無性菩提に至  
 らしめん。生死即涅槃、  
 煩惱即菩提とも、今  
 こそ思ひ悟りたれ。暇  
 申て、人々」とて、花鳥、座  
 敷を立つと見えしか  
 ば、鏡の影も消え果て  
 て、巫女も元の心になり  
 にけり。これを見聞く人々  
 も、夢幻の如くに  
 て、現ともさらに思は  
 れず。面白さといひ、奇  
 特といひ、一方ならぬ不  
 思議なれば、人々、とりく  
 の賛嘆なのめならず。  
 小袖十襲、  
 砂金  
 百両  
 賜  
 はりて、  
 巫女をば、  
 すな

36才 (挿絵6)

(挿絵6)

かへされ  
けり・<sup>106</sup>  
はち  
帰され  
けり。  
はち

1 ひける 2 あら 3 のえ 4 ナシ 5 や 6 ナシ 7 に 8 おかみ 9  
 ナシ 10 え 11 ナシ 12 ふし 13 は 14 物 15 御 16 御 17 ナシ 18 ナシ  
 19 て 20 なん代 21 の事 22 か 23 わ 24 は 25 ナシ 26 ナシ 27 ひ 28  
 き 29 とう 30 ととき代にふしき有 31 きさき 32 い 33 き 34 ナシ 35 とう  
 36 ナシ 37 ナシ 38 みや 39 ナシ 40 らは 41 何とて 42 ナシ 43 ナシ 44  
 の 45 ナシ 46 や 47 しういを 48 ナシ 49 らは 50 我 51 ナシ 52 ナシ  
 53 とりわけ 54 人 55 ナシ 56 ナシ 57 を 58 の 59 を 60 を 61 の 62  
 し 63 す 64 と 65 も 66 を 67 ナシ 68 ナシ 69 い 70 ひ 71 の 72 え  
 73 ま 74 のち 75 ところ 76 ほ 77 め 78 ほ 79 ひ 80 る 81 ひさし 82  
 き、ては 83 や 84 わ 85 ナシ 86 なをむ 87 をとち 88 と 89 ぬ 90 を  
 をい木 91 ナシ 92 や 93 それく 94 に 95 は 96 え 97 ひ 98 ナシ  
 99 もひしられたり 100 ナシ 101 ナシ 102 す 103 のほうひ 104 く 105 いろく  
 の御ひきて物たひ 106 まつたひと申なからあまりにきとくなる事なればふてに  
 まかせてかきをくなりこにちの御くわひこそゆかしくおほえ候へけんしかくのこ  
 とし

【第七段】

36ウ・あまりのきとくの事<sup>3</sup>

なればふてにまかせてしる  
しをくなりこれを見た<sup>4</sup>

まはん人くはねんふつ十

【第七段】

あまりの奇特の事

なれば、筆に任せて記  
しをくなり。これを見給

はん人々は、念仏十

へん申給ひてかのひかる

源氏のゆうれい

すゑつむ花

のしうしんの

ほたいのためと

ゑかうし

給へ<sup>5</sup>

遍申し給ひて、かの光

源氏の幽霊、

末摘花

の執心の

菩提のためと

回向し

給へ。

1 まつたいと申なから 2 に 3 なる 4 かき 5 にちの御くわいこそゆか  
 しくおほえ候へけんしかくのことし



図2 「花鳥風月」A本 表紙見返し



図1 「花鳥風月」A本 表紙



図4 「花鳥風月」B本 裏表紙



図3 「花鳥風月」B本 表紙



図6 「花鳥風月」B本 裏表紙見返し



図5 「花鳥風月」B本 表紙見返し



図8 鶴 (図6の部分)



図7 松と橘 (図6の部分)



図9 「花鳥風月」A本 第一図



図11 「花鳥風月」A本 第三図



図10 「花鳥風月」A本 第二図



図13 「花鳥風月」A本 第五図



図12 「花鳥風月」A本 第四図



図15 鏡に現れた源氏と末摘花  
(図12の部分)



図14 「花鳥風月」A本 第六図



図17 「花鳥風月」B本 第二図



図16 「花鳥風月」B本 第一図



図19 「花鳥風月」B本 第四図



図18 「花鳥風月」B本 第三図



図21 「花鳥風月」B本 第六図



図20 「花鳥風月」B本 第五図

図23 「くちよせみこ」『人倫訓蒙図彙』巻七  
(国立国会図書館デジタルコレクション)図22 鏡に現れた源氏と末摘花  
(図19の部分)



図25 「花鳥風月」A本 第2丁裏

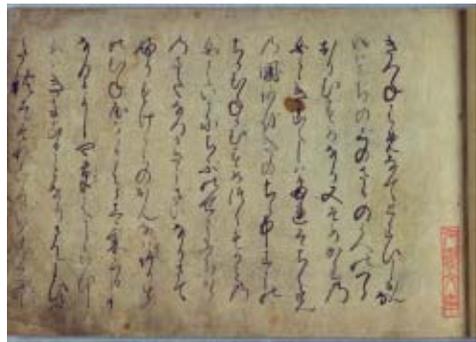


図24 「花鳥風月」A本 第1丁表



図27 「花鳥風月」A本 第23丁裏



図26 「花鳥風月」A本 第23丁表

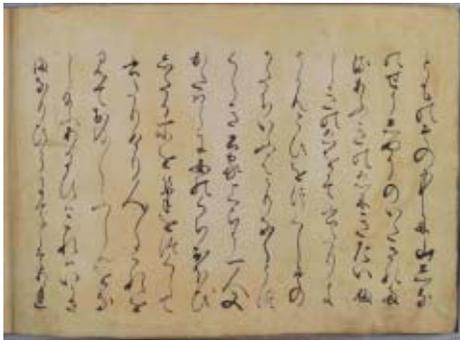


図29 「花鳥風月」B本 第1丁裏

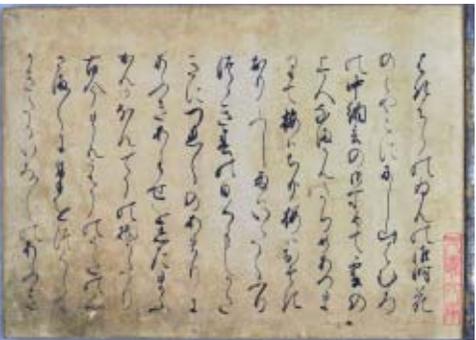


図28 「花鳥風月」B本 第1丁表

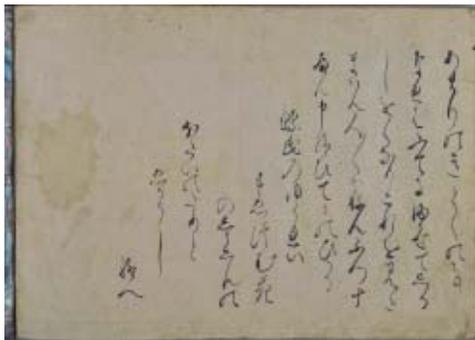


図31 「花鳥風月」B本 第36丁裏



図30 「花鳥風月」B本 第35丁裏

On the Nara-ehon *The Tale of Sisters Kachō-Fūgetsu*

– Reprinting and Interpretation of the Nara University Library Version –

Kimiko Shiode, Yumi Makisaka, Hitoshi Ohta

Masataka Watanabe, Yuji Nakao

*The Tale of Sisters Kachō-Fūgetsu* is a story in which noble people playing a fan matching game debate as to whether the hero painted on one of the fans is Genji or Narihira. To find the answer, they call the *Azusa-miko* sisters Ka-chō (Flower-Bird) and Fū-getsu (Wind-Moon), female shaman who summon oracles of spiritual beings by plucking the azusa (catalpa) bow. It is an *Otogizōshi*, short stories of the Muromachi and Edo periods, which includes the digests of *The Tales of Ise and The Tale of Genji*. Therefore, this story is also characterized as being a guide to classical literature.

The Nara University Library has two versions of the Nara-ehon *The Tale of Sisters Kachō-Fūgetsu*, referred to as A and B. Both the A and B versions were formerly stored in the Kuyō Bunko, whose facsimile editions have been published but have not yet been reprinted. This study shows the B version's reprinting and interpretation, and compares the reprinting with that of the A version. The lines of the two versions' texts are explained on the basis of the above comparison. Regarding the illustrations, each scene is identified with reference to the text, and the respective characteristics are identified.

**Key words:** The Tale of Sisters Kachō-Fūgetsu, Nara-ehon, illustrations